九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[30] Crossover : 文理融合プログラム

https://doi.org/10.15017/19940

出版情報：Crossover. 30, pp.1-39, 2011-07. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

新しい出発を祝して（平成23年度入学式祝辞）

服　部　英　雄
九州大学大学院比較社会文化学府長

みなさん

入学・進学、おめでとうございます。

わたしはこの学府の学府長を務める服部と申します。

みなさんはこの九州大学大学院比較社会文化学府で学ぼうと決意されました。修士課程入学の方の場合は、３倍の倍率という難関を突破され、今日の日を迎えられています。新入生・進学生のみなさまに､心よりお祝い申し上げ､歓迎いたします。

この春、当大学院には修士課程67名、博士後期課程32名が入・進学しました。うちわけを国毎に見ると、修士は日本（26）、中国（36）、米国（1）、アルゼンチン（1）、ブラジル（1）、ベルギー（1）、メキシコ（1）

博士後期は日本（19）、中国（6）、中国（台湾）（2）、韓国（1）、英国（1）、ラオス（1）、ポーランド（1）、オーストラリア（1）

であります。今年はこれまでの日本文化専攻・国際文化専攻に加えて国際コースが新設され、修士１、博士後期１、計２名が入学しました。ここでは英語による授業を行います。わが学府は狭い専門領域にとらわれない学際性をもち、国際性がきわめて豊かな大学院です。

このことも考慮して、挨拶文は印刷したものを配布しております。

みなさん

みなさんの友人の多くは、おそらくは、はやくも就職されて安定した道を選ばれたのでしょう。しかしみなさんは４年間の大学での勉強にはあきたらず、さらに大学院で学ぶという新たな道を選択されました。あるいは修士課程での学術をさらに延長したいと考えられました。そのために故国から離れた人も多くいます。日本から見て、地球の裏側からこられた人もいます。

みなさんはより高い目標を掲げられました。不安はあるかもしれないが、より高い目標にまで到達したい。その選択は、みなさんの志が高いことを示しています。そして高い志を、あなたの熱い思いが支えていることと思います。わたしども教員スタッフ78名、ならびに職員一同はあなたがたの思いが達成されるよう、全力で支援してまいります。

むろん高い志とは上だけを見ることではありません。わたしたちの社会は健康なものと健康ではないもの、富めるものと貧しいもの、強者と弱者からなっています。弱い立場・恵まれない立場への目配り・視線を含んでこそ、はじめて真の高い志といえるでしょう。また進学したくとも諸事情で断念した人もいます。学問を断念した人に替わって、この場にいることも忘れてはなりません。

みなさん

わたしの高校時代の担任教師は、自分が尊敬する職業は第１が芸術家、第２が学者であるといいました。わたしたち教員は、職業として学問を選択することができました。わたしどもは学問研究に従事することを誇りとし、社会の期待に応える

○○○ 巻頭言

べく日々努力しています。しかしはたして学問は、社会から尊敬される存在で、ありつづけてきたのでしょうか。

東日本大震災はわたしたちには驚愕の出来事でした。３月11日以来のニュースは衝撃と不安に満ちたものばかりです。やがて一月となる今も、原子力発電所事故は、何ら解決へのみち筋がたっていません。先の見通しは、皆目わかりません。被害の甚大さに、いまや「想定外」ということばは、なんら免罪ではありません。想定をさえ、しようとしなかったことへの、国民の目線はきびしいものがあります。科学がもっとも進んでいたはずのこの日本で、もしかして、わたしたちは科学の敗北をまざまざと見せつけられているのではないか。わたしたちの心は沈みがちです。

この災害はいわれるような未曾有（みぞう）、つまり未（いまだ）曽（かつて）あら（有）ざる災害ではありません。わたしの友人は陸前高田市が郷里です。今回大きな被害を受けた地域です。幼い頃、祖母から明治・昭和三陸津波の怖さをつねに聞かされていたそうです。三陸では津波は、けっして遠くはないできごとでした。明治三陸津波はマグニチュード8.5、津波の高さは最高38.2メートルとされ、今回と同等だったといわれています。

４年前には原発事故も体験しています。2007年、新潟県刈羽原発で中越沖地震による火災と放射能漏れ事故がありました。今回も起きるべくして起きた事故ではないか、といわれはじめています。

学問はむろん過去の災害とその悲惨さを知らなかったわけではありません。よくいわれる貞観11年（869）地震は、1200年前、東北地方を襲った地震です。その強大さを警告していた研究者は多数いました。貞観地震・津波をテーマとした論文は1990年以来30本ほどの数があって、そのときのマグニチュードは当初の研究段階では７とされていたものが、数年前には8.4に訂正され、地層堆積物の分析から、内陸部への津波があったことも証明されて、今回のマグニチュード９に限りなく近づいていました。もちろん研究者は責任と使命感から、また職務として、行政・企業に対して、その事実を知らせ、対策を取るように提言しました。しかし反応はきわめて鈍かったようです。2009年、２年前には政府・経済産業省の審議会でも議論され、東京電力にも伝えられたと報道されています。残念ながらその提言が生かされることはなかった。あえて目をつむった人がいたのではないか。けっきょくは多数の生命財産を救えず、数々の悲劇を招いた。そのことに対し、論文を公表した研究者たちはどれほどにくやしい思いをしていることでしょう。

学問の世界も人間社会の一部であり、正しくとも受け入れられないことは多々あります。正しい指摘を受けても、行政や民間企業はただちに是正を開始は、しないのです。残念ながら学問内部でも同じ現象があるかもしれません。

仮にあなたが通説のまちがいを発見し、通説を批判する正しい新見解を提出したとします。ふつうならばあなたの新研究は、多数の人びとに紹介され、引用されるでしょう。しかしそうではないことも考えられます。あなたの新説は通説に依拠してきた多数の研究者を敵に回すことになります。歓迎されるとは限らない。無視される可能性も少なからずある。しかし、いまは活字以外にWEBによる情報発信もできます。味方はいます。時間は最大の味方です。利害のない若い世代の研究者が支援してくれます。仮に少数者になっても、正しいと信じたことは主張していかねばなりません。科学的な合理性を持つ正しい意見は、必ず正しくない意見に勝つのです。通説に依拠してきた古い世代は、やがて退きます。

学問は崇高なものです。なぜなら学問は真理・真実を追究するしごとだからです。真理は何によりも強い。学問研究に従事できることはすばらしいことです。

みなさん

人間はその発生とともに知の営みを行ってきました。つまり学問の始まりは人間の始まりと同じです。最初は、よりよい生活のために、より安定した生活を求めて。小さな集団・範囲にとどまっていたその知は、やがて文字の発明、紙の発明で、時間や空間を越えて拡がります。学問の場はイコール図書館であった時代が長く続きます。日本の前近代でいえば東大寺や高野山のような寺院に書物が集積され、やがて足利学校や金沢文庫のように、寺院のなかに独立した学問機関が設けられることもありました。歴史的に見れば、大学の基本は図書館で、それが知の集積でありました。このことはおそらくいまでも変わりません。ただ現在はインターネットの時代となりました。みなさんはわたしたちと異なり、生まれたときからコンピュータ環境のなかにありました。みなさんはわたしたちの時代の碩学、権威であった大学者の知識を瞬時にして得ることができます。学問は飛躍的に発展すると予想されます。

みなさん

学府教員78名はみなさんの学問研究を支援します。同時に多くの九大職員もみなさんの学問研究を支援します。窓口になってくれる大学院係はむろんのこと、庶務係をはじめとする事務職員スタッフ、またパソコン環境を整備するスタッフ、さらに図書館職員がいます。あなたたちは自らの身分証明書であるIDカードで、ネットの九大図書館にマイライブラリーを設定します。もし伊都地区図書館で目的の図書が探せない場合でも、学内の各図書館、あるいは国内の各図書館からインターネットで図書を取り寄せることができます。必要な論文がこのキャンパス内で入手できないときも、同様にWeb上で取り寄せられます。若干の経費が必要となるので、指導教員にお願いしてみてください。指導教員にはあなたたちの教育のための予算が配分されています。このようなサービスは、かつてわたしたちが東京出張の都度、国立国会図書館に行き、長い順番待ちをして閲覧し、複写の予約をしていたことに比べると、時間労力の大幅な節約です。あなた方は非常に恵まれています。論文を発表する場合には、レフェリーのある査読付きの学術誌に掲載することが望ましいが、掲載誌の了解を得て九大図書館のリポジトリQIRにWeb登録することができます。あなたの新研究は即時に全世界から読まれます。大学リポジトリの歴史は浅く、我が学府の登録論文の数はまだまだ少ないのですが、みなさんが論文を書き終える頃には、飛躍的に登録数が増えて、アクセス数も増加していることを期待しています。みなさんの研究環境は各段に向上しており、あなたの勉学を支援するために、日々、多数の職員が働いていることを忘れてはなりません。

コンピュータは便利な道具です。しかし道具に過ぎないということもできます。いうまでもないことかもしれないが、学問の世界において、コンピュータが答えを出してくれるわけではありません。溢れる情報の中で、何が正しいのかを、常に判断していかねばなりません。答えは決して準備はされていません。コピーアンドペーストでレポートを書くというようなことは論外も論外で、学問研究とは無縁の行為です。ウィキペディアという電子百科事典があります。これは書き込みが自由です。わたしも書き込んだ経験があります。匿名で簡単に投稿できることに、おどろきます。個人が自由に書き込むことができる便利さは、検証吟味を経ない個人的見解が流布する危険と裏腹です。

みなさんの学問研究をめぐる条件は20年前、30年前に比べれば飛躍的に有利になっているように見えるし、そのこと自体は否定できない事実です。しかし情報化社会には落とし穴も、より多くあるのです。

もっとも留意すべきは、情報のうち電子情報化

○○○ 巻頭言

されているものは、ホンの一部にすぎないということです。ほんとうに大切な情報が入っていなかった結果を、わたしたちは目にしているのかもしれません。研究では人の手を経ない現実の生の情報が必要で、それこそがあなたたちの求める情報です。

資料素材は、あなたがいかなる問いを発するのか、によってきまります。資料素材は、あなた自身が見つけるのです。最初から用意されているわけではありません。

みなさんはすべてを疑うところから、学問研究が始まる、と考えてください。あふれる情報からではなく、自分の頭で考えることが必要です。これまでの説明のどこかに、ちらりと不自然さを感じることが、必ずあるでしょう。どこが不自然なのかを自分で考えてください。それを追及していけば、先学たちがどこで誤ったのかもわかるはずです。研究史は知らないよりは知っていた方がよいが、信じ切ってはいけません。集団のなかだけにいて思考していてもいけません。

みなさん

高い志を持ち続けてください。みなさんがいまの高い志と熱意を持ち続ければ、かならず当初の目的を果たすことができます。わたしたちは全力で支援します。いまの日本はおそらく第二次大戦以後、最大の危機を迎えています。まだまだ悪くなることが考えられます。しかし、かならず復興します。地震からも、津波からも、原発からも、ぜったい負けずに立ち上がります。桜が咲きました。やがて北国の東北地方でも咲くことでしょう。復興は始まっています。貴い犠牲を出し、痛ましい体験をしました。それにもとづく反省は、これからの判断に継承されます。新しい考え方がどんどん取り入れられていきます。世界に率先して安全で幸福な社会を示します。いまこそあなたたちの、若くて新しい学問研究が、日本に、世界に、求められているのです。

ともに学び、力強い学問を築きましょう。





新任教員紹介

多様な価値を持つ熱帯の自然資源をいかに管理していくべきか

百　村　帝　彦
（地球環境保全講座）

2011年４月より比較社会文化学府の地球環境保全講座を担当することとなりました百村帝彦（ひゃくむらきみひこ）と申します。大学での所属先は、箱崎キャンパスにあります熱帯農学研究センターですので、比較社会文化学府・研究院のみなさんのおられる伊都キャンパスとは少し離れておりますが、よろしくお願いします。

私はもともと京都市の出身で、九州で生活したことはなかったのですが、福岡の街を歩くと京都同様に市街地の中心部が固まっており、非常に便利で住みやすいと感じています。こちらに赴任して早速自転車を購入したのですが、これからいろいろな所に回ることができそうで、楽しみにしています。

それでは簡単に自己紹介をさせていただきます。これまで私は、実務的な事業と研究業務と双方にかかわってきておりましたが、実務的な業務の代表的なものとしては、国際協力事業団（JICA：現国際協力機構）のラオスでの森林保全プロジェクトに専門家として勤務したものがあります。ラオスの農山村地域で、森林減少・劣化を抑止するため、村レベルでの森林管理の仕組みづくりを行うとともに、森林再生のための技術指導をおこなっておりました。その前にも、青年海外協力隊員としてタイの植林事業にかかわっておりましたので、いずれも国際協力に関する活動に従事していたことになります。



JICA専門家の際に手がけた簡易苗畑の設置。ラオス国立大学の教官と

その後は、アジアの環境問題に取り組む研究機関に所属し、モンスーンアジア地域、とくに大陸部東南アジアでの森林管理に関する研究に携わっておりました。そこでの私の関心は、多様な価値を持つ森林を、誰が・いかに管理していくべきなのかということに焦点を絞っておりました。

森林には様々なアクター（利害関係者）が関わっています。森林やその周辺地域に居住し、キノコ、タケノコ、薪といった非木材森林産物（NTFP）を採取して生計の糧としている地域住民、森林資源を利用し利益を得ることを考える民間企業・投資家、環境保全や経済開発のために森林管理を促進しようとする政府機関、そして森林管理を通して生物多様性保全や貧困削減を目指すNGOや援助機関などです。このようにそれぞれのアクターによって、森林に対する見方は大きく異なり、その価値のつけ方も違ってきます。このようなアクター間の思惑の相違から、様々な紛争や対立が目に見える形で、または潜在的に発生しています。資源を利用する場として、また保全する場として森林が囲い込まれ、力を持たない地域住民が不利益を被ることになったり、資源の管理方法をめぐって、中央政府と地方行政が対立するといったこともあります。このような中、森林に最も近く、政府の施策に声が反映されにくいローカルの視点に配慮しつつ、いかに森林資源の管理を進めていくかということを主に研究しておりました。



村人に植林事業の影響を尋ねる。ラオス南部にて

近年、加速度的に進んでいく社会・経済のグローバル化によって、森林の管理はもはやその国の政府の意思のみで収まることは出来なくなっており、近隣諸国からの経済・社会的な影響、そして遠く離れた先進国や国際社会の意向をも大きく受けています。このような中、熱帯の自然資源管理に関心を持ってくださる学生の皆さんと一緒にこの課題を考えていくことができればと思いますので、よろしくお願いいたします。

あえて二足のわらじをはく

三　島　美佐子
（地域資料情報講座）

2011年２月より、縁あって協力教員として着任いたしました。普段は箱崎キャンパスの総合研究博物館（旧工学部本館３階）におります。このたびは比文のような越境的研究が推奨される学府の教員として参画させていただけることを、「総合研究」博物館の専任教員として、大変有り難く思っています。

私の専門は、もともと植物系統分類学で、特に染色体の数や形に注目した細胞分類学や倍数性進化を中心に研究しておりました。2002年に九大博に着任した後は、生物学的な基礎研究に加え、博物館に関わる実践研究（マネジメントや展示、科学コミュニケーションなど）にも取り組んできています。

九大に来てからの生物学的な基礎研究では、植物に加え、材料として腹足類（貝類）や昆虫なども共同研究で扱うようになりました。現在の自身の主なテーマは、バラ科とクスノキ科の一部の群を材料とした交雑性や種分化、そして、植物に寄生して虫こぶ（ゴール）を作るタマバエ類（昆虫）の種分化やゴール形成機構の解明です。タマバエが寄主植物上で生きていくためは、菌類も深く関与しているようですので、そのうちぜひ動・植・菌の三界を制覇したいものです。

そもそも虫こぶなど、植物にとっては迷惑千万なデキモノで、私自身、植物採集やさく葉標本作りでは、かつては虫こぶや病気の部分を無条件に捨て去っておりました。ところが、虫こぶの形や機能の多様さに気づかされ、しかもそれら植物が本来持っていない形や機能が、植物以外の生き物による遺伝子操作で作り上げられているらしいということを知ってからというもの、すっかりその不思議さにはまってしまいました。私が現在一番魅了されているのは、「ゴール多型」という現象です。「ゴール多型」とは、１種類の寄主植物に寄生する１種類のゴール形成タマバエが、２種類以上の形の虫こぶを作る現象です。この「ゴール多型」は、多様な虫こぶの形がどのようなメカニズムで進化してきたのか、また、その形の違いがゴール形成昆虫の種分化にどのように関与しているのか、ということを明らかにする上でよい材料であると私は考えています。

最近は特に、ブナという日本固有の植物に寄生するブナカイガラタマバエにおけるゴール多型を中心に研究をすすめています。

ところで、大学博物館という職場には、上記のような自分の専門性に立脚した研究に関連する業務（実習指導や、標本の管理・データベース化など）以外のものが多々あります。すなわち、展示や催事の企画と実施、それらに関連したパンフレットやポスター・チラシ・動画作り、そして博物館全体の運営（マネジメント）、外部交渉などなど…。これらの業務をこなす上で常に念頭においているのは、様々な「利用者」のことです。例えば、一般向けあるいは子ども向けの、展示や講演会、学習プログラムの実施などでは、専門性の高い研究内容や研究者の活動などを、いかに伝えるか・どう表現するか、ということに心を砕くようになります。このことは、科学の専門家（研究者）と非専門家（一般市民）の間の双方向コミュニケーションと相互理解を促す「科学コミュニケーション」という考え方に、おおいに通じてくるのです。また、設立十年を経てもまだ認知度の低い九大博…もっとたくさんの学生さんに知ってもらい、かつ学内外の皆さんに来てもらうにはどうすればいいか？ということも必死に考えるようになりました。このあたりは、統合新領域学府が扱うユーザーサイエンスや感性マーケティングのような領域になってきます。

数年前から本気で業務に取り組み始めたら、それが徐々に実践研究的になってきました。業務を自分の専門研究の時間を奪う雑用とみなすのか、あるいは研究＆スキルアップの一つとみなすのか…私は断然後者の方でモチベーションが上がるので、博物館のあり方や科学コミュニケーションに関わることも研究として取り組んでいるというわけです（それが正しいか否か、良いか悪いかは別として）。

ここ３、４年は、自分がなにをしたいか（＝本音は自分の専門研究）よりも、この大学博物館をよりよくするためにはどうすればよいか、ということに重きをおいてがむしゃらにやってきたのですが、今回の協力教員を仰せつかったことにより、忘れかけていた情熱や昔の夢がまたふつふつと蘇ってきました。時間は有限につき異なるフィールドを抱えることはトレードオフであることはやむを得ないものの、この好機を最大限活かしていきたいと思っています。


早春のブナ育種場（盛岡）にて調査中の筆者


2009年から始まったインド調査でのスナップ


研究成果をどう伝えるか？サイエンスカフェ


子ども達を対象にした科学ワークショップ

新任教員紹介

私は農家の娘です

ゲルマー・アンドレア
（ジェンダー論）

私は、ドイツ南西部の農家で９人兄弟の８番目の娘として生まれました。６歳の夏、兄弟たちがいつものように両親と共に農場へ働きに行っている間、私は家に残って家事をしなければなりませんでした。なぜなら、これが女の子に任された仕事だったからです。私は家に一人、残されるのが不安でたまりませんでした。とは言っても、その時たまに隣の家から訪ねてきた当時90歳代だった祖父の思い出には、懐かしさを覚えます。祖父が顔を見せる度に、私は母の申しつけ通り、彼にシュナップス（アルコールの強い辛口の蒸留酒）を用意したものです。ちなみに、母がしばらくして私に教えてくれたことによると、この祖父はヒットラーにたいへん批判的でした。その一方で、私が生まれる前に亡くなったもうひとりの祖父は、戦後でさえ後悔するどころか、あの集団虐殺を犯した独裁者を肯定するような発言をしていたそうです。やがて夏が去り、私は入学することになり、孤独で退屈な「家事」の日課も終わりを告げました。どれだけほっとして、勉強のはずみとなったことでしょうか。ひょっとすると、学問の世界でジェンダー研究を追求するという、その後の関心やキャリアはこんなところに根ざしているのかも知れません。

私は、ハイデルベルグ大学で日本学やドイツ文学、政治学で修士号を取得し、緑の党と提携している基金やドイツ学術交流会（DAAD）から奨学金を受けて、ボーフムのルール大学で博士号を取得しました。学位授与直後、東京にあるドイツ政府機関のドイツ・日本研究所で非終身契約を結ぶことができ、2001年から2007年まで東京で過ごしております。これによって、私は日本の女性史学やそのパイオニアであり、無政府主義から国家主義へ、戦後に民衆主義を訴えたフェミニズム理論家、高群逸枝に関する博士論文などを出版することができました。

2007年には、イギリスのニューキャッスル大学で雇われ、日本語とカルチュラル・スタディーズのプログラムを教え、運営しました。イギリスは私にとって全く新しい社会だったので、日本から彼の地への移動はかなりのカルチャー・ショックとなりました。他の国々に移り住む際、言葉の背後にある意味を「読んだり」、ある程度理解するまでしばらくの時間がかかります。なぜなら、言葉を読み解くためには、字義通り読み取れる意味のみならず、習慣や期待の中で成文化させているコードを知る必要があるからです。

私が今年の２月に九州大学へ着任したのは、男女平等をより促進し、九州大学において女性教員数を上げる施策に関連しています。私の研究・教育関心についてご説明すれば、視覚的な歴史、すなわち文化や人種、ジェンダーに関するイデオロギーの視覚的表現に最も興味を持っています。具体的には、戦時期の日本とドイツの雑誌における視覚的プロパガンダ戦略を扱っています。なぜ、歴史上のプロパガンダを研究することが大切なのでしょうか。確かにドイツも日本も民主主義的な社会になったといわれます。けれどもプロパガンダはその様式を変えながら存続し、現在においても巨大組織にコントロールされるマスメディアを通して私たちを取り巻いています。それは、公共空間を支配することで、他の批判的で代替的な言説を抑制しています。これは70年前も、現在にも当てはまります。

原発は安全だというプロパガンダを信じ、今やその存在の基盤を根こそぎ奪われている福島県などの農家に深く共感します。それに、この国に住む私たちそれぞれが、戦時期を批判的に考える必要を痛感します。それは、私たちが今日、直面している問題を解決するために必要な批判的な眼差しや精神の発達に欠かせないことだと思います。

最後に、幼稚園で東北大震災の募金活動に取り組んでいる５歳の息子が描いた絵をご紹介したいと思います。絵に添えられた言葉は、原発事故について彼と話す時に出たものです。息子は、私と一緒に原発反対デモにも参加しました。私にとっては、東北の自然災害の被害者の方々への協力とは、募金などの支援と同様に、将来にわたって人々や動物、土地、海全てを放射能汚染する人的災害を二度と繰り返さないように政治的要求を表明することです。私たちにとって最も大切なことは、子供のために安全で健全な環境への徹底的な期待やビジョンを回復させることだと痛感します。

（英日翻訳に協力してくださった乗松優さんに感謝）



受賞報告 ○○○

全学教育功労賞を受賞して

鏑　木　政　彦
（比較文化講座）

３月の、東北地方太平洋沖地震発生から間もない頃のことだったと思う。松本常彦先生が私の研究室にいらっしゃり、ご実家はいかがでしたかと、尋ねられた。私の故郷は、福島県のとある小さな寒村で、福島第一原発からは南西方面に50キロメートルほど離れたところに位置する。その時期は原発よりも津波に注意が向いていたと記憶しているから、松本先生が訪れたのはおそらく３月第３週のはじめのことではなかっただろうか。震災の話題の後で先生は、実は全学教育功労賞に先生をという話があるので、推薦してよろしいでしょうか、と切り出された。きけば、平成18年度の全学教育カリキュラム改革で担当した仕事に対して、そのような話がもちあがっているという。

平成18年度のカリキュラム改革では関係する先生方に迷惑をかけたので、受け入れるのに逡巡する気持ちがなかったわけではない。しかし、大学の組織運営に関わる仕事のなかで学んだことの一つなのだが、このような話の背後にはいろいろな人の関与があり、意地を張ることでその方々にかえって迷惑をかけてしまうことがある。松本先生には推薦文執筆の仕事を負っていただくことになるが、光栄に存じます、とお受けすることにした。

平成18年度全学教育カリキュラム改革については今ではもう知らない人も多いと思うので、簡単に振り返っておきたい。当時作成した資料を見てみると、カリキュラム改革の実施に踏み切った理由は次の通りである。雰囲気を知ってもらうために、当時（平成16年末）の文書を引用しておこう。

---

①平成11年度改訂カリキュラムから既に７年が経過

平成11年度改訂カリキュラムから４年を経過し、学士課程のカリキュラムとして１サイクルを終えることから平成15年度に向けたカリキュラムの見直しが図られてきたが、工学部のJABEE問題、医学部保健学科（平成15年度）および芸術工学部（平成16年度）の設置に伴うカリキュラム検討を優先させる必要が生じ、カリキュラム改訂が遅延してきた。以前の改訂から７年が経過した現在、カリキュラムの見直しが急務となっている。

②現在の全学教育カリキュラムの問題点

教養部解体後の全学教育カリキュラムは、教養教育の縮小という時代背景を基に構想されたものであったが、時代と共に教養教育の重要さが再認識され、見直しが要求されている。また現在、当初の全学教育の理念を崩壊させるような諸問題が発生している。具体的には、コア教養科目の理念と実態の乖離、コア教養科目と個別教養科目の体系性の欠如、個別教養科目と基礎科学科目の非効率的な開講実態等があり、これらを修正し理念に即した体系的な教育プログラムを再構築する必要に迫られている。

③国立大学法人化の影響

今後ますます激化する大学間競争において九州大学が評価を高めるため、大学の本来の目的である教育を重視し、より多くの優秀な学生を確保するための措置が急務となっている。これを実現するためには、九州大学の教育理念に則った九州大学独自の個性的かつ効果的な教育を実施することが不可欠となっている。

④多様化する学生の学力への対応

学生の学力低下は、年々深刻になってきている状況にある。更に、平成18年度からは学習内容が以前に増して削減された新高等学校学習指導要領に基づき教育された学生が入学してくることとなり、学生の多様化がますます進行する。このような状況に十分対応した教育プログラムを構築する必要性が生じている。

それまでなされてきたことへの否定を含むからだろうか、改革のための文章には気負いが伴う。読み返すと恥ずかしい限りであるが、カリキュラム改革が避けて通れぬ課題として自覚されていたことを想像してもらえたら有り難い。

ところで、私が比文に赴任したのは2000年（平成12）年10月である。その半年後の2001（平成13）年４月、当時の総長補佐会が全学教育企画委員会に改革を付託し、全学教育のカリキュラム改革の検討は始動した。もちろん、新米教員がはじめからこれに関わるはずはない。私が関わるようになったのは、2003（平成15）年の４月頃からである。九大採用時に世話人をして頂いた哲学の森俊洋先生（現在、九州大学名誉教授）が私を委員に推薦されたためと記憶している。推薦のきっかけとなったのは、2003（平成15）年３月発行の『大学教育』（九州大学教育研究センター）に、「教養の〈コア〉をどのように構成するか―〈コア教養科目〉再考」という小論を書いたことだったと思うが、詳しい経緯はよく知らされていない。

さて、2003（平成15）年９月30日、参画していた全学教育企画委員会ワーキング・グループは、教養教育科目の改革の基本的な問題点を整理し、改革の方針を明確にするに

いたった。ワーキング・グループの検討結果は「全学教育科目『教養教育カリキュラム』の改革について―中間報告と改革案」（骨子案）としてとりまとめられ、翌10月開催の全学教育企画委員会に附議され、承認された。その後の検討の過程については、これもかつての資料から引用しておこう。

---

①骨子案の教育改革推進室 WGでの検討

全学教育企画委員会では、全学教育は、学部教育の全体に関わるものとして総合的に検討を進める必要があるとの認識に立ち、骨子案を教育改革推進室と全学教育企画委員会委員から構成される教育改革推進室ＷＧに付託した。同 WGを４回開催し検討した結果、平成16年３月25日付け文書をもって、骨子案に賛同すること、また全学教育を考える上では専攻教育との関係の整理及び調整が必要であることの見解が全学教育企画委員会に示された。

②全学教育の改革及びその実施組織等の整備についての提言書並びに学部教育の改革検討スケジュールの策定と採択

平成16年11月に開催された全学教育企画委員会及び実施委員会の合同委員会において、「全学教育の改革及びその実施組織等の整備について」の提言書並びに「学部教育の改革検討スケジュール」が採択された。更に、これらの提言書及び検討スケジュールは、平成16年12月に開催された全学教育機構委員会並びに教育審議会に附議され了承された。

③教務委員会・平成18年度全学教育カリキュラム改革専門部会でのカリキュラム改革案の策定

全学教育機構委員会並びに教育審議会での審議に基づき、教務委員会の責任の下で平成18年度全学教育カリキュラムの改訂案を策定することになり、平成16年12月24日に第１回の平成18年度全学教育カリキュラム改革専門部会を立ち上げ、専門部会 WGでの検討を進め、以下に示す改革案を策定した。

上の日付をみて不自然な点に気づいた人もいるだろう。不思議なことに、2004（平成16）年３月末から11月までの間、全学教育改革には目立った動きがなかったのである。

平成18年度からスタートするカリキュラムなのだから、平成16年度中には全学的な議論を経たうえで改革案を確定し、平成17年には実施担当者の割り振りぐらいの準備で済むようにしておかなければならないと、私は考えていた。早く検討しないとたいへんなことになりますよと、当時センター長だった嶌洪先生（現在、九州大学名誉教授）にもお話しをした記憶がある。ところが改革の動きは停滞し、再度動き始めたのは、資料の②、③にあるように、平成16年末のことであった。

なぜ平成16年度に入ってから検討がストップしてしまったのだろうか。はっきりしたことは今でもわからないが、私は次のように想像している。検討をストップしたのは、改革案に対する反対の声が強くなって、議論が暗礁に乗り上げるのを恐れたためのことではなかったか、と。私自身は、できるだけ多くの人が参画する議論の中で改革案を検討していくことが九大の教育文化を培い、よりよい案の策定につながっていくと考え、その観点から議論の停滞を批判的に捉えた。しかし、改革案を確実に実施しなければならない立場からみれば、議論が活発になって、改革案の落としどころが見えなくなることこそ恐れるべきことであったのではないだろうか。そのために、よりよい案よりも、確実な実施のための態勢づくりが優先され、改革案の広範な検討の必要性は過小評価された……。

私の勝手な想像でしかないだろうが、このようなことは今でも案外みられるのではないだろうか。

引用した資料に書かれた業務のうち私が携わったのは、教養教育科目の構想とその具体案のとりまとめ、具体的には共通コアと文系コアの整備でした。成案を得るまでには、いろいろといたらぬ点が多く、関係した先生方にはご迷惑をおかけしました。しかしながら、多くの方々のご協力により実施案は整えられ、予定通り平成18年４月から新カリキュラムを開始することができました。いくつかの微修正を経ながら、それは現在まで続いております。この度、全学教育功労賞を頂くことができたのは、何よりもこれら全学教育教養科目への先生方のご協力によるものです。この場を借りて御礼を申し上げます。

大学院広報誌の記事にはあまり相応しい内容ではなかったかもしれませんが、比文の教員・学生比率が比較的理想的な状態であるのは、比文教員の全学教育への関わりがあるからです。その意味で、全学教育への関わりは比文大学院を理解するためにも重要なことと思い、細々としたこともあえて記した次第です。お読み頂きありがとうございました。

自著を語る ○○○

『「知の加工学」事始め―受容し、加工し、発信する日本の技法』

松永 典子、施 光恒、吉岡 斉編、編集工房球、2011年3月

執筆者を代表して　松　永　典　子
（日本語教育講座）

本書は、九州大学大学院比較社会文化研究院日本研究プロジェクトチームによるプロジェクト：「知の中継地としての日本に関する総合的研究―『知の加工学』の創成に向けて―」（平成21年度～22年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト採択課題）の教育研究成果を広く公表する目的により刊行したものである。

〈本書刊行に至る経緯〉

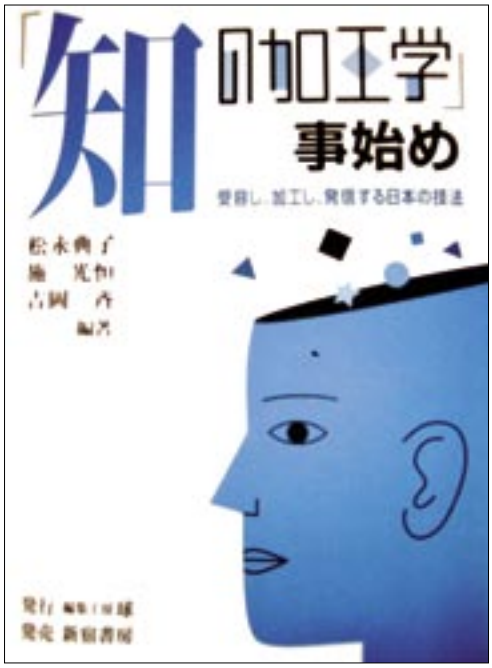
本プロジェクトチームは、人文社会科学の立場から、総合的日本研究を行い、その研究成果を大学院の日本研究者養成・留学生教育に資するような教育モデルの提示へとつなげるべく、平成21年（2009年）7月に活動を開始した。国際的観点から言えば、人づくりを通したアジア諸国の国づくりへの支援、国内的観点としては、九州の学問、九大の学問というアイディンティティ形成へつなげることが本プロジェクトの目指す大きな方向性である。現在の人文社会科学系の学問に期待されている重要な課題は、個別に行われてきた各学問分野の「理論的統合を行う」こと、並びに「論理や方法自体の研究を行う」、いわゆる「メタ知識の学」としての役割を探究することである。本プロジェクトでは、この個別諸学の俯瞰という学術的要請に応えるべく、日本が伝統的に他から受容した知をうまく「加工」し、「活用」する能力、すなわち「知の二次的加工」に秀でている点に着目した。そして、この「知の加工」「知の加工学」の観点から、日本と他のケースを比較することにより、日本の長所や短所、今後の発展・改善の方向性など個別の課題を明らかにしつつ、他国の同様の課題にも貢献し得る普遍的な視点を確保することを目的とし、その社会還元を目指している。

具体的には、日本による先端の文化・技術・思想・制度の受容・加工・発信のプロセスとその手法を解明すべく、日本語教育・日本文学、日本史（技術史）、地理学などからなる「文化・歴史班」と、政治学（政治理論、政治思想、国際政治学）からなる「政治・思想班」、科学技術史・軍事史・経営史などからなる「産業・技術班」という三班を配置した。この各計画研究班での研究と併行して、各分野で意識化されていない分野間の連携を意識化・体系化する作業を総括班で行う。以上の作業をもとに、本プロジェクトでは、新しいディシプリンとしての「知の加工学」創成の基盤づくりを行うことを目指している。

2009年度の主な活動は、毎月のコロキアム、公開シンポジウム「『日本的なもの』の再評価―『知の加工学』の視点から―」（2009年11月3日）の実施である。本シンポジウムでの議論をもとに、以下の点が確認された。つまり、「知の加工学」の理論構築において必要とされる、外来のアイデアをそのまま直輸入するのではなく、ローカルな状況に合わせる必要がある、という当然の命題が当てはまる事例を、いくつか新たに加えることができた。

2010年度からは、「知の加工学」という大学院の授業科目（複数の教員が担当する総合演習）を開講した。これはつまり、前年度実施してきたコロキアムを軸とした研究活動と教育活動を合体・連携させることにより、メンバー各人の日本研究の成果を教育に還元する試みである。この授業では、世界の先端知識を受容し、また、それを加工、発信する一連のプロセスを様々な側面からとらえ、総合的に「日本」を研究することを目標にしている。

また、知識経営の理論に分析及び理論構築の手法を学ぶべく、学術シンポジウム「『知の加工学』からみた日本の技術経営」（2010年12月11日）を開催し、新たな学問分野の開拓にはずみをつけたところである。



○○○ 自著を語る

〈本プロジェクトの意義〉

本プロジェクトへの評価として、学内のヒヤリングでは「知の加工学」という切り口が現在人文社会科学に求められている個別学問を俯瞰し統合する視点を有する点から、総合的日本研究の研究視点としても有効であることは確認され、一定の評価を得た。ただし、科学史や軍事史などの研究事例の中には、日本の「知の加工」には単に優れている点のみならず、不足する点や失敗例があることも明らかになってきた。こうした前提に関しては、さらに検証を重ねていく必要がある。

さらに、本プロジェクトを実施する重要な意義は人づくりにある。たとえば、近代の日本語教育・留学生教育は単に語学を磨くスキル養成にとどまらず、教養教育や専門教育の一翼を担い、人材の輩出に大きく寄与した。こうした日本の知的活動の長所を活かし、「『世界の世話焼き』にならん」とした、熊本出身の横井小楠の言葉こそ、九州で実践する人材養成の指標となるものであろう。つまり、「知の加工学」の活用により、各国における自由民主主義的で、豊かな国づくり、地域づくりのための知識の産出・普及を目指し、それに寄与する人材養成に寄与できる視点を有することが本プロジェクトの重要な意義である。

〈今後の展開〉

こうした日本の急速な近代化を可能にした近代の知の経験と蓄積にはなお見直すべき点が多く、イラクなど日本研究に新たに着手する中東地域も注目している。中でも、明治期の近隣諸国からの留学生は、西洋の学術的概念や技術を英語やフランス語で直接学んだのではなく、「日本語で」学び、それを自国の近代化に取り入れていったのである。これは、日本が他から取り入れた知を自国で利用するのみならず、他と「共有」できるような形に「加工」し「活用」する能力、いわゆる「二次的加工」の能力に秀でているということを意味する。今後、人材養成のモデルを他国でも応用可能なものにしていくには、こうした「加工」「活用」のプロセスの解明のみならず、「発信」にも目を向け、それを焦点化していく必要がある。

このため、2011年度からはメンバーの補強をはかり、これまでの「内からみた日本研究」の視点に、新たに「外からみた日本研究」という視点を加え、他国の日本研究、各国地域研究を比較し、日本の特徴を抽出する作業にも着手している。

他にも発信したものを土着化させたノウハウの探究も必要となろう。こうした点は、今後、現在の実践をもとに、教育モデルの構築、並びにその妥当性と教育「内容」の有効性の検証へと発展させていく。分野的には、「宗教」、「翻訳」、「サブカルチャー」など不足している分野もあり、補充していくことも不可欠である。

〈謝辞〉

最後に、本研究プロジェクトの研究成果の一端が出版という形で公表できるようになったことは、九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト採択課題として学内の研究助成を受けたことに大きく負うものです。ここに記して深く感謝申し上げます。

今後もこのプロジェクトは継続して活動を実施していくことが確認されております。本書刊行への反響として、これをきっかけに「六本松学派」というようなものができればという修了生からの熱いメッセージも届いており、比文現役スタッフのみならず、院生、比文OBも交えて、今後このプロジェクトが新たな展開を生み出すのではないかという期待も抱く今日この頃です。関係する皆様より、さらなる御協力・御指導を賜りますようお願い申し上げる次第です。

●目次

序論「知の加工学」の可能性（施　光恒）
近代日本の「知の加工」と翻訳―「新漢語」を事例として（松永典子）
九州帝大初の女子留学生―趙賢景の軌跡にみる知の移動/加工（波潟　剛）
幕末・明治期における西洋の政治的諸概念の加工―認知意味論的な視点（大河原伸夫）
“知の加工”と“教養”―和辻哲郎とデューイにおけるヘーゲル哲学の加工（鏑木政彦）
日本近代文学における身体の受容と表現―明治期裸体編（松本常彦）
石炭液化とイソオクタン製造にみる日本の技術水準―米独の航空機用揮発油製造技術と戦時の技術移転（三輪宗弘）
日本におけるコミュニティ概念の定着と住民自治―カタカナ語による知の受容・加工・発信可能性（松井康浩）
日本留学者の帰国後の就業状況と留学経験への評価―中国人の大学院修了者を事例として（阿部康久・徐　亜文）
法整備支援と日本の経験（大屋雄裕）
日本の原子力産業の国際戦略―知の加工学への示唆（吉岡斉）

『戦後在日コリアン表象の反・系譜 ―＜高度経済成長＞神話と保証なき主体―』

林　　相　珉
（韓国・韓南大学）



本書は、平成22年２月に学位（比較社会文化）を授与された博士論文に、終章の『あしたのジョー』論をあらためて加え、タイトルの変更などを含め大幅な加筆・修正を行ったものである。以下は序章の書き出しである 。

「あ～知ってる知ってる～」というある嘆声とともに回想される文学作品や映画、漫画、演劇、そして芸能人やスポーツ選手など、この本が扱うのはマイノリティの社会空間だけでなく、むしろ大文字の〈日本人〉に受容され表象されてきた在日コリアンである。そして、この本の目次をみて「あ～知ってる知ってる～」と口にする人はと言えば、世代別に考えるならば、おそらく団塊世代もしくはそのジュニア世代にあたると思われる。つまり、昭和30年代に青少年期を過ごした世代である。昭和30年代は戦後日本の経済的繁栄をもたらす高度経済成長が始まる時期ばかりでなく、様々なレベルで主体が分節・解体されていくナショナル・アイデンティティが作動しはじめる時期でもあった。本書は、戦後日本の在日コリアン表象における主体の構築、すなわち「あ～知ってる知ってる～」という認識枠組みが前提にしている「在日らしさ」の形成について考察するものである。（１頁）

昭和30年代は、戦後日本のナショナル・アイデンティティが形成されはじめる時期ばかりではなく、在日コリアンを扱った文学作品や映画が話題となった時期でもある。しかしながら、「ALWAYS　三丁目の夕日」（2005年）をはじめとする昭和30年代ブームでは、当時の在日コリアンをめぐる文化的話題を取り上げることは少なく、戦後復興を可能にした朝鮮戦争の扱いを含めて、〈高度経済成長〉に関する語りへと同化させていく場合が多い。そして、昭和30年代ブームに見られるこのような同化現象は、その形を変えながら在日文学が領域化される際にも確認することが出来る。

在日文学が日本文壇に認定され領域化されるのは、1960年代後半に行われる文学の再編、すなわち明治百年を境に夏目漱石が「国民作家」となっていった時期と重なる。同時代における文学の再編は、在日コリアン作家に民族性を優先して書くことを強制することによって、在日文学を日本文学の特殊な一領域として囲い込むことになる。つまり、在日文学に関する語りは、戦後日本の「国民文学」に関する語りへと組み入れられるように囲い込みを受けながら、その存在を認定されてきたのである。その結果、民族性を中心に前景化してきた在日コリアンの文学史的記述は、第１世代を最も正統な民族性を具備した起源として設定し、第２世代と第３世代は起源としての第１世代との距離として記述される。そのため、必然的に民族性に包摂されない人々を排除する働きをすることになる。筆者はこうした同化の論理によって、あるいは民族性の強調によって、排除を余儀なくされてきた〈保証なき主体〉としての在日コリアンを言語化することを目的とした。（韓国における在日コリアンの文学史的記述も世代を中心に記述されることが多い点、1960年代後半の日本の囲い込みを共有・模倣していると言える。詳しくは「韓国における「在日文学」研究文献目録」（「敍説」Ⅲ－06、2011年４月）を参照）

筆者はこうした問題意識から、本書に三つの次元を設け考察を試みた。（１）日本人による在日表象、（２）在日コリアンによる自己表象、（３）在日表象における相互遂行性、

○○○ 比文叢書

である。まず、第1部の前半では昭和30年代における日本人による在日表象について考察する。昭和30年代における在日コリアンに関する語りは、帰国事業をはじめとする政治的言説による場合が多いものの、同時代の在日コリアンをめぐる文化的話題が示している通り、大文字の政治的言説ばかりではなく、社会的・文化的言説が互いに交差しながら形成されたものでもある。第1章では、1959年にベストセラーになった『にあんちゃん』を取り上げ、同時代の出版社の戦略と読書感想文という教育装置を考察しながら、同作品がどのようなパラダイムの中で消費されていったかを検証する。そして第2章では、『キューポラのある街』を同時代の北朝鮮帰国事業と経済政策の文脈から捉え、日本―北朝鮮―韓国それぞれの思惑が時々刻々変化するのと並行して、初出―初版―映画―改訂版の帰国事業に関わる内容も微妙に変化し、主要テーマである「友情」のもつ意味が変化していくことを読み解く。

第1部の後半では、在日コリアン作家による自己表象、つまり在日コリアン作家が後の時代から時間差をもって「昭和30年代」をどのように表象したかについて考察する。第3章では、1981年の金石範『祭司なき祭り』を取り上げ、1958年に起きた小松川事件を小説に召還することによって、金石範が模索していた新しい主体性とその構築の困難さを合わせて示す。そして第4章では、1958年の旧陸軍大阪造兵廠から鉄屑を盗み出したアパッチ族事件を挿入した1994年の梁石日『夜を賭けて』を取り上げ、在日コリアン内部における排除の論理や「反」ナショナリズムに潜む権力性について考察する。

第2部では、本名や国籍という出自から帰納法的に評価するのではなく、日本人との交渉の中で構築される「在日らしさ」を考察するために、日本社会の表舞台で演じる／演じられる在日スターに注目する。第5章では、1970年前後の小劇場運動において〈差別／被差別〉という二項対立図式を軽やかに飛び越えてゆく李礼仙を、第6章では1970年代に大阪を中心に展開された「本名を呼び名のる運動」に漫画として描かれ理想化される張本勲を、そして第7章では日本の国民的演歌歌手を演じ続けた都はるみを中上健次がモデル小説『天の歌』として描いた点に注目し、中上健次の言う「五分五分の関係」にみられる発話者の特権性について考察する。最後の終章では国民的漫画とも言える『あしたのジョー』を取り上げ、矢吹丈と東洋バンタム級チャンピオンである韓国の金竜飛選手の対戦を同時代に起きていた第2次朝鮮戦争の危機説と日韓の経済接近という文脈から考察を試みたものである。

目次

序　章　在日表象の反・系譜
　　1　昭和30年代と在日表象
　　2　保証なき主体の言語化
第Ⅰ部　高度成長期の物語―「起源」としての昭和30年代
　第1章　忘れられた朝鮮―安本末子『にあんちゃん』論
　第2章　北朝鮮帰国物語と高度成長―『キューポラのある街』論
　第3章　「小松川事件」と対話する文学者―金石範『祭司なき祭り』論
　第4章　「ハナ」の政治学―梁石日『夜を賭けて』論
第Ⅱ部　〈特権的〉肉体論―在日スター研究
　第5章　物語る「肉体」―李礼仙論
　第6章　口籠る民俗的アイドル―張本勲論
　第7章　フィクションとしての「着物」―都はるみ論
終　章『あしたのジョー』における日韓パワーゲーム―矢吹丈と金竜飛の対戦

本書のもくろみは、アイデンティティや民族的アイデンティティなどの硬直した枠組みによって排除されもれ落ちる要素から、戦後日本における在日コリアン表象の構造と力学、そして分節される主体であるがゆえの様々な可能性を模索することにある。それは在日コリアンを固定的なアイデンティティをもつ主体としてではなく、流動的で可変的な主体として記述する可能性を考えることでもある。

＊＊＊＊

最後に、比文叢書の意義について一つ。自分の著書が出るということは、内面的緊張関係を形成してくれる。博士論文そのものは、他者に引用されることはそれほど多くないから気持ち的には楽。しかし、著書になると話は変わってくる。本を購入した読者は、身銭を切ったお金を取り戻すべく一行一行にドシドシと迫ってくる。著書が出てからまだ2ヵ月足らず。しかし、次の論文が中々進まない。それは多分、院生の時とは違って、見知らぬ読者の顔が見えはじめ、余計なものは書けなくなったからだと思う。悶々とした日々が続く中、悶々としている自分自身を意識化することはとてもつらいけど、この「悶々」はきっと私自身を成長させてくれるような気がする。自分の身の丈を知ることと安住を許さない点において、叢書出版の効果は抜群だと思う。

改めて、叢書出版の機会を与えて下さった九州大学大学院・比較社会文化学府の皆様に深く御礼を申し上げます。

金子光晴の詩法の変遷――その契機と軌跡

金　　雪梅
（比較社会文化研究院特別研究員）



比較社会文化叢書　ＸＸ
花書院　361頁

大正後期に詩壇デビューを果たした金子光晴（1895～1975）の詩作品が評価されたのは昭和20年代後半に入ってからであった。日本近代詩史上の金子の位置づけが困難で、収まりの悪いことは、各種研究書における金子の詩の組み入れ方から窺える。こうした現象は、戦後に形成された偏った金子評価が一因している。同時に、先行研究でもたびたび指摘されながら、いまだ整理し切れていない金子の詩法の変遷という問題が大きな要因となっている。

金子研究は、戦後、金子の詩集が立て続けに刊行された昭和20年代後半から行われるようになった。その後、昭和35～46年の昭森社の『金子光晴全集』（全5巻）、昭和50～52年の中央公論社の『金子光晴全集』（全15巻）の刊行をきっかけにして、昭和50年代は金子研究の隆盛期とも言える時期となった。戦後から形成された偏った金子評価、つまり「抵抗・反戦詩人」という神話がこの時期に成立し、流布するようになったのである。こうして金子の作品についてはもっぱら思想性が重視されるようになり、「強固な自我」と「反骨」の精神が強調されるのである。近年では〈抵抗・反戦詩人〉に加えて〈家族愛〉の詩人としても語られている。

このような金子評価が主導的になる一方、この十年間の金子研究は、アプローチが多岐にわたってきている。とはいえ、詩法の形成と変遷を総括的に論じたものはない。金子が詩の創作を始めたのはいわゆる日本近代詩の胎動期、つまり口語自由詩が確立する時期であったが、現代の口語を詩語として積極的に詩的言語の実験を行なったという観点からその詩業を論じる視点がこれまで欠けていたことは否定できない。そこで、従来のイデオロギー的評価に縛られず、詩人金子光晴を何よりも言語表現の探求者として追究しようとしたのが本書である。

本書は時代順に全三部、全六章構成で、金子の初期から終戦直後の作品までを通覧し、詩法の変遷の軌跡をたどり、変容の契機や様相を考察した。第一章から第三章までを第Ⅰ部（大正5年～大正15年）とし、初期における詩風の二度の転換と行き詰りを考察した。まず第一章では、第一回ヨーロッパ滞在から帰国した後の大正後期の仕事であるフランス詩の翻訳を考察した。民衆詩の模倣から出発した金子であったが、フランス詩と接触してパルナシアン的な手法を学ぶに及んで、古語・漢語をちりばめた古風な翻訳を行なった。同時代の高村光太郎の訳詩とは著しい対照をなす。第二章では、パルナシアンに学んだ『こがね蟲』の形式美を重視した手法と華麗な詩風で描き出した官能的感覚的世界の表出が、大正末期という「前衛の季節」においては、すでに〈遅れてきたもの〉になってしまったという、その運命の様相を考察した。金子は、詩誌「日本詩人」に参加しながらも、隆盛する口語自由詩とは距離を置き、無名詩誌「楽園」において「ライン本位」の詩を追求した。「定型によってつむ細かい修行」と言える「ライン本位」の詩の追求と『こがね蟲』に現れた古典的世界との関連についての考察は従来の研究を補足するものである。第三章では、『こがね蟲』出版直後の関東大震災によって、『こがね蟲』で試みた高揚感溢れる華麗な表現が危機に直面し、夢想的な世界から身を引いて、日常的な対象を描き、平易な表現による散文詩を模索したことを確認した。梶井基次郎「檸檬」との比較では大正末期の感性という時代感覚の共通性が認められるが、一方、近代詩における日本語表現について萩原朔太郎と意見が分かれたのは、口語自由詩を模索し、「新しい美の表現の材料」とする口語で詩を書き続け、戦時期を潜りぬけた金子の真骨頂の一面を示す事柄である。

第四章と第五章からなる第Ⅱ部（昭和初年～昭和10年）においては、異民族・異境体験である海外流浪の時期にみられる新たな詩語とテーマの発見を明らかにした。まず第四章では、当時の他の文学者と異なる眼差しで体験した1920年代の上海という異境が詩風の変貌の契機となっていることを確認した。詩集『鱶沈む』を中心とする1920年代の作品に〈下降〉（消えてゆくもの、廃れてゆくもの、淀んだり停滞したりするもののイメージ）を呼び起こすような表現が頻用され始

めたこと、また異邦の言葉を擬した言葉、人間の肉体や生理をあからさまに表す言葉、不潔なものを表す言葉、卑猥な表現として受け取られるような言葉などを新たな詩語として使用している点を確認できた。（以下の絵はすべて『金子光晴画帖』［三樹書房、1981年11月］による。）



唱詩人の絵



上海の肉や叉焼を切る図

「上海は一つのかくはん機。／ひきずりこまれた人間どもは混血となる」

第五章では、1930年前後の東南アジア体験が重要な詩的モチーフを提供したことを確認した。「南方詩集」諸詩篇に見られる「混血女／娘」というモチーフの発見によって、金子の詩において女性が他者として生彩を放つ主題となったのである。

第六章すなわち第Ⅲ部では、戦時中と戦後の詩作の問題を考察した。終戦直後、詩誌「コスモス」周辺の詩人によって「抵抗･反戦詩人」という神話が形成された経緯を整理した。さらに、「抵抗・反戦詩人」を既定の事実として捉えることは避け、戦時中の中国体験、いわゆる「戦争詩集」に組まれた金子の戦争詩、戦時中に雑誌発表された詩論などを具体的に考察した。戦時中の金子の詩的活動は、実用的な言語への無自覚的な依存がモチーフの拡散や詩の通俗化を招きかねないと認識した上で、現代の口語の詩的言語としての構造やその可能性を探求したという点に意味がある。これは、思想的な側面よりも重要な意味を持っている。





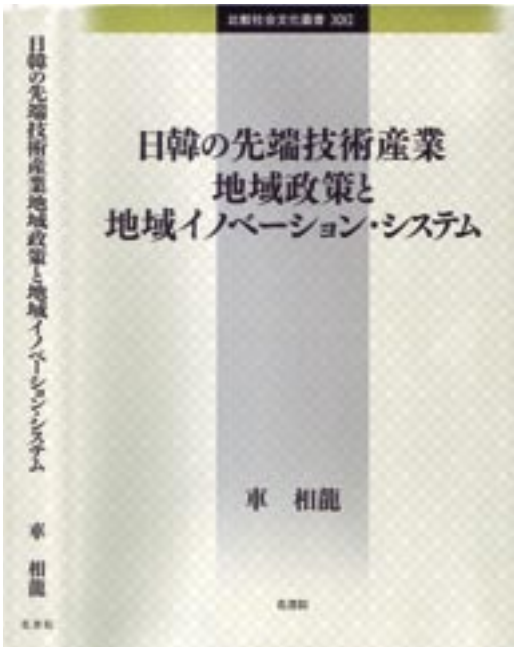
東南アジアの椰子をモチーフにした絵

「ニッパ椰子が茂る。（中略）ニッパは　女たちよりやさしい」

最後に、詩法の模索に注目しつつ、戦後の『人間の悲劇』（昭和27年）を考察し、「僕」という一人称で貫いている詩的自叙伝の意味を再確認した。戦争の時代が終わった時、金子が選択した詩の方法、あるいは表現様式は、「僕」という一人称で織り上げる詩と散文の平衡を模索する新たなスタイルであった。戦時中から現代口語に徹して「僕」という立場でしか語らなかったその詩法に、いっさいのイデオロギーから自由であろうとする詩人の姿勢が読み取れる。それはその後に展開していく「僕」を詩的主題とした徹底的な自己探求の文学の幕開けなのである。

拙著『日韓の先端技術産業地域政策と地域イノベーション・システム』を語る

車　　相龍
（長崎県立大学経済学部）



今年３月に21冊目の比較社会文化叢書として花書院から出版された拙著『日韓の先端技術産業地域政策と地域イノベーション・システム』は、2002年４月から約３年間にわたる比文での勉強の産物といえる。もちろん、その時から既に６年も過ぎた時点での出版であったため、データや図表、文章の一部などを現状に合わせて改める作業は避けられないことであったが、だからといってそれが「原本」を大きく改変するまでに至ったわけではない。問題認識も、論理展開も、当時のままなのだ。

「社会文学」第34号に掲載される本の紹介文にはこう書かれている。

日韓の先端技術産業地域政策には「技術」と「産業」の論理はあるけど「地域」の論理がない！こうした問題認識に立った韓国出身の元「計画屋」が、日本の地理学の知見を借りて大胆に提案する地域イノベーション・システムの政策論。日韓における実際の政策事例を踏まえ、イノベーション創出における地域理解の戦略的な含意を捨象しない政策モデルを探る。

そうだ、当時の私にとってまず問題とされたのは、日韓の先端技術産業地域政策に「地域」の論理がないことであったのだ。そして、本の序論に当る「第１章　先端技術産業地域の再編と地域イノベーション・システム」には、そうした問題認識が浮き彫りになっている。つまりそこには、①日韓における先端技術産業地域の社会・空間的再編が時代に即した技術かつ産業の変化に応えようとした政策的な動機によるものであることと、②そうした再編は必然的に地域的な性格を強く帯びることになりがちだが、それを促す諸政策の論理を支える地域イノベーション・システム論などの従来理論の地域概念には限界があることなどが論及されている。

ところが、韓国で建築工学を学んだ工学部出身で、しかも「役所系」の計画づくりを主な仕事とする「計画屋」の道を歩んでいた自分に、先端技術産業地域政策について論ずるための具体的な知識や明確な認識がもとからあるわけではない。たまたま韓国政府が国策として進めていた「モデルテクノパーク」づくりを手伝った経験から得られたほんの少しの知識・認識がすべてであったのだ。そこで、比文での勉強は、まずそうした知識・認識を手にするための努力から始まったわけだが、本の「第２章　先端技術産業地域に関する政策理論の再検討」にはそこから得られた自分なりの成果が盛られている。とくに、先端技術産業地域の政策理論が定立されているとはいえない状況の中で、できるだけ本質に近い理解を得る原論を構築するために、その原点といえるシリコンバレーから見直した上で、技術開発論および経済地理学の視座から、技術の開発と技術政策、産業地域の形成と産業政策について探り、知識・技術創造を促す技術・産業・地域に関する諸政策の結合方向を模索することにした。

そこで注目されたのが、地域イノベーション・システムという語が持つ政策的な可能性である。今は既に学術用語かつ政策用語としての地位を得ており、それを裏付ける一定の科学的根拠も揃われつつあるが、地域イノベーション・システムという語が持つ操作概念としての性格は未だ強く、そのほとんどは、「地域」概念の包括性と「システム」アプローチの統合性に起因すると思えた。つまり、あらゆる要素をひっくるめる地域概念と、それぞれの機能を果たす諸要素を合わせて一つの性能を発現させるシステムアプローチとが結びつけられたことで、地域イノベーション・システムという語は、これまでのイノベーション政策において主題とされなかった要素を地域から見つけ出したり、カオティックに見えていた

○○○ 比文叢書

要素機能とシステム性能との関係を分節化して見直したりする際に有効ではないかと思われたのだ。

その際、「イノベーション」の本質を「新結合」として理解すると、技術や産業に限らないありとあらゆる地域要素が従来とは異なる形で結ばれる状況を想定することができ、場所の形成や空間の構築をも含むシステムの整備という新しい政策的な知見が切り開かれると期待された。本の「第３章　地域イノベーション・システムの政策論」では、そうした視座から、まずグローバル化・ローカル化・情報化という時代的トレンドの変化と地方分権の進展こそ地域イノベーションを促す内外の力であると位置づけ、次いで人間と場所の関係から再認識された地域概念に基づく地域イノベーション・パラダイムの転換の必要性を訴えた。そして、地域イノベーション・システムの構造的（静態的）特性を地域構造との関係に留意した政策モデルで示し、最後には地域イノベーション・システムにおける主体的（動態的）特性をイノベーション・メカニズムの形成過程を描くことで表した。とりわけこの第３章は、地域構造講座の宮川泰夫先生（現、皇學館大学現代日本社会学部長）と山下潤先生、基層構造講座の佐藤廉也先生など比文の諸先生からご指導いただいた日本の地理学の知見に大きく助けられており、個人的には、比文での３年間の勉強の成果が最も凝縮されたところと感じる。

既往の研究成果を批判的に組み立てなおすことで得られた新しい枠組みの有効性が実証を通して確かめられるのは当然であろう。本の第４章から第８章までの内容はそうした自分なりの試みの「痕跡」といえる。まず「第４章　地域イノベーション・システムの政策動向」では、日本の「クラスター戦略」と韓国の「国家均衡発展５ヵ年計画」を中心に、両国政策の特性を把握し、第３章で示された政策モデルと合わせて地域イノベーション・システムの政策的な全体像を描く総論を構成しようと試みた。次いで第５章からは、各論として、筑波研究学園都市（首都圏研究学園都市）、大徳研究団地（地方中枢都市）、慶北テクノパーク（地方大学都市）、北九州学術研究都市（地方工業都市）など母都市の持つ地域的な性格がそれぞれ異なる４つの事例を各章ごとに取り上げ、各々の抱えた問題かつ課題とその解決を試みた手段など政策的な特徴を明らかにした上で、地域構造の変容かつ変質に応じた地域イノベーション・システムの政策的実践の方向を模索しようとした。ただし、自分の勉強不足、さらには能力不足のせいで、意図通りの各論をなすほどの実証ができたとは言い難い。上で「痕跡」という言葉が使われたわけはそこにあるのだ。

充分とはいえない事例研究であったが、そこから共通して見られることもあった。それは、先端技術産業地域における政策的な広域化傾向である。本の「第９章　結論」では、まず本の内容全般の総括を行う中でそうした政策的な広域化がもたらしている変化の様相を模式図で表した上で、次いで「新結合の構造」というもう一つの操作概念を使って、そうした広域化傾向にある日韓の先端技術産業地域政策における地域イノベーション・システムのあり方について論究し、最後にはそれぞれの事例についての政策的提言を行った。

本のあとがきにも書いたが、私が先端技術産業地域政策について日本で勉強しようと思うようになったのは、1980年代にから進められた「テクノポリス計画」に接したことに関係がある。『テクノポリス基本構想調査総合報告書』（1982）によると、テクノポリスとは「地域の文化・伝統と豊かな自然に先端技術産業の活力を導入し、『産』（先端技術産業群）『学』（学術研究機関・試験研究機関）『住』（潤いのある快適な生活環境）が調和した『まちづくり』を実現することにより、産業構造の地域集約化と高付加価値化の目標（創造的技術立国）と21世紀へ向けての地域開発の目標（定住構想）との同時に達成しようとする戦略である」と定義されている。結果的にはあまり良い評価は得られずに終わったものの、そうしたテクノポリスの定義自体は時代を超えて今も有効ではないかと思われる。自分の未熟さで欠点の多い未完の作業で終わってしまったのは残念だが、比文で勉強しながら夢見たのも、実は「産・学・住が調和したまちづくりを実現する政策論理の開発」に違いない。そういう意味で、この本は、比文での勉強が自分に見せてくれたそうした夢の片鱗ともいえる。だから、多少は恥ずかしいところもあるが、この本がそうした夢に興味を持つ読者に読まれ、様々な批判批評をいただくことを願いたい。

『高精度元素・同位体分析システムを用いた原始古代人口移動・物流ネットワークの研究』の概要と経過

田　中　良　之
（基層構造講座）

【プロジェクトの概要】　表題にあるプロジェクトは九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト、通称P&Pに比文研究院・学府の教員を中心にして申請し、昨年採択されたものである。

比文の地球科学分野が有していた顕微レーザーラマン分光装置、蛍光X線分析装置等の分析機器に加え、平成21年度補正予算により導入されたレーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析装置（LA-ICP-MS）およびフィールドエミッション電子プローブマイクロアナライザー（FE-EPMA）といった最新鋭分析装置群を駆使して考古資料の分析を行い、原始古代社会の解明に迫ろうという試みである。

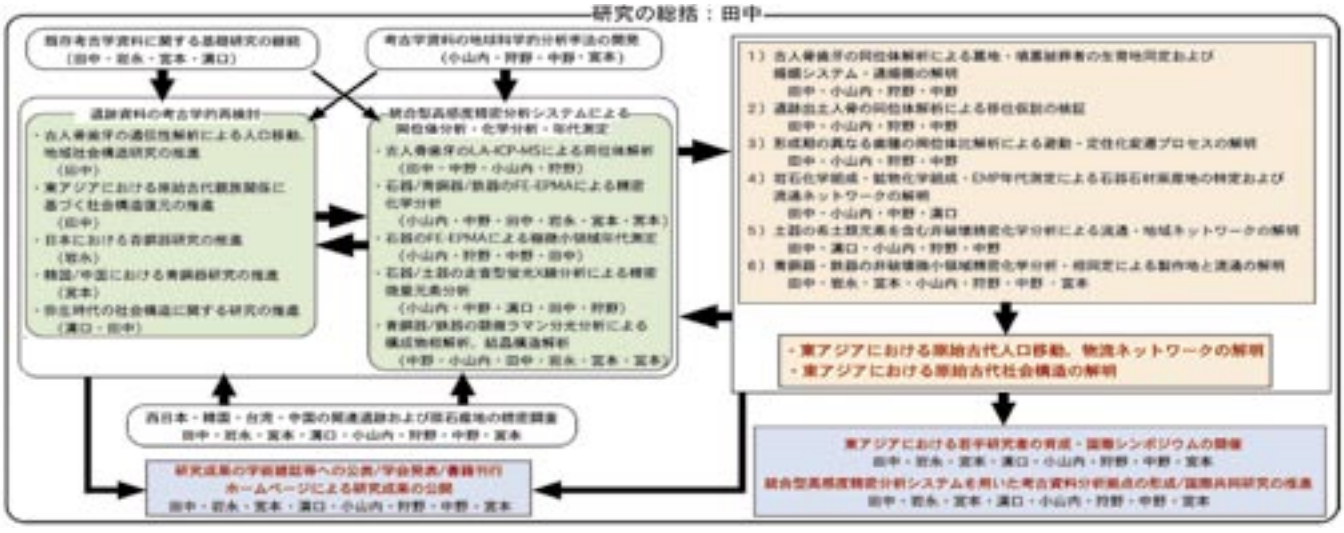
メンバーと分担は、田中良之（代表、比較社会文化研究院教授・考古学）小山内康人（比較社会文化研究院教授・地球科学）、狩野彰宏（比較社会文化研究院教授・古気候学）、中野伸彦（比較社会文化研究院助教・岩石学）、宮本知治（理学研究院助教・地球化学）、溝口孝司（比較社会文化研究院准教授・考古学）、岩永省三（総合研究博物館教授・考古学）、宮本一夫（人文科学研究院教授・考古学）であり、研究分担は下図の通りである。

そして、これらの申請時のメンバーに加えて足立達朗（比文学術研究員・岩石学）、田尻義了（埋文調査室学術研究員・考古学）・舟橋京子（学振RPD・現総合研究博物館助教・考古人類学）、端野晋平（学振PD）・石田智子（比文学術研究員・考古学）といったスタッフ、および比文の考古学・地球科学分野の院生が参加している。

現在1年目が終了し、成果も徐々に上がってきた状態であることから、ここにその概要をそれに至るエピソードを交えて紹介することにしよう。また、具体的な個々の研究についてはそれぞれの担当者がこの後に記しているのでご覧いただければ研究の進展と成果が具体的にご理解いただけると思う。

【プロジェクトは本陣で始まった？】　さて、このプロジェクトはまさに文理融合の研究であり、学際大学院という比文の特徴を遺憾なく発揮したものといえる。しかし、同じ部局に文理の教員がいるからといって、共同研究が簡単に企図されるというわけではない。現に、比文創設以来、いくつもの共同研究が行われてきたが、文理融合型のものは少ない。「水と油」ほどではないにしても、簡単には文理は融合しないものなのである。

しかし、文理の教員が混在していることは可能性をもたらすことになる。要はきっかけ次第である。私たちにとっては平成17年度の修士論文口述試験がそれであった。弥生時代の磨製石器研究を行っていた能登原孝道君（現熊本県教育庁文化課）に岩石学的コメントが欲しいと思い、口述委員を小山内教授に依頼したのである。



その場できわめて有益な助言をもらって味を占めた能登原君は後輩も誘って小山内研へと通うようになり、小山内教授・中野助教の助勢を得てついには弥生時代前期の石包丁の石材産地が対馬南端にあることを突きとめるに至った。これが私たちにとっての一つの成功体験となったのである。

その後、比文は伊都へと移転することとなり、その準備に追われる日々が始まった。移転作業部会長であった小山内教授と副院長であった私は、会議の後一杯やることが多くなり、飲みながら「非破壊で歯のストロンチウム同位体分析は可能か？」「それはLA-ICP-MSとクリーンルームが必要だ」「それは九大にあるか？」「ない」「うーん」「概算で要求してみるか？」といった会話をするようになった。六本松の「焼鳥本陣」でのことである。

その後は平成20年度の概算要求に出したものの果たせず、21年度に再トライした。この時は前年と違って、総長をはじめ好感触であったが、その直後に大型補正予算が組まれたことからこれに申請し、幸いにも比文にLA-ICP-MSとFE-EPMAが導入されることとなった。

【プロジェクトの立ち上げへ】　さて、私はもともと人骨歯牙の計測値から血縁関係を推定し、原始古代の親族関係を研究してきた。それがなぜストロンチウムに関心を持ったかというと、ストロンチウムの同位体比は地質（岩石）によって異なり、水に反映されることから、人間の体に飲食物を介して骨や歯に同化されることになる。そして、永久歯のほとんどは幼児期に形成され、その後は代謝しないために、歯のストロンチウム同位体比は幼児期の生育環境を示すわけである。その特性を活かして世界中で歯牙ストロンチウムの分析が行われ始めていた。結婚によって移動した人物を特定できるこの分析は、私の研究にもきわめて大きな意味を持つ。ぜひとも自分でやりたいことだったのである。

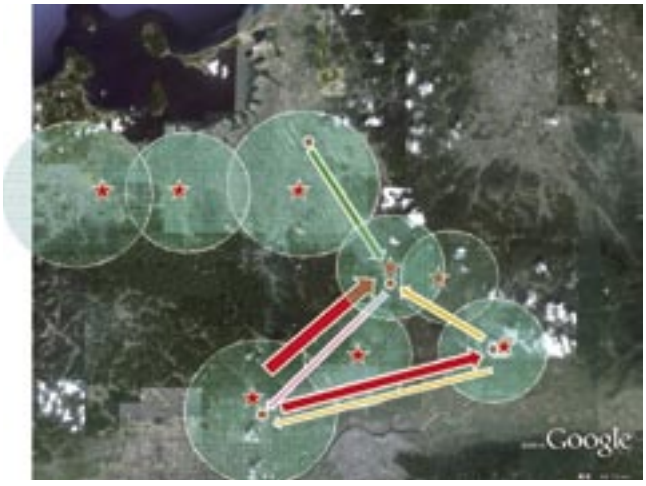
ただ、これらの機器によって行う元素分析・質量分析はもともと岩石の分析に効果的に使われてきたものであり、岩石に由来する考古資料、すなわち石器、土器、青銅器、鉄器、ガラスなどに対しても最先端の分析を施すことができる。これが小山内教授の持論であった。たしかにその通りである。したがって、これらの機器を導入することで生産と流通のメカニズムと人の婚姻システムを解明し統合して、原始古代のヒト・モノの流通を通した社会システムへと迫ることができる。そして、比文研究院・学府教員と卒業生のコネクションにより東アジア規模で研究を展開できるという展望が得られたのである。

次はプロジェクトの申請である。まずはP&Pに申請して、すぐに大型科研を狙うはずであったが、重複申請の壁があり、科研は一年延ばすこととなった。そして、幸いにもP&Pはほぼ申請通りに採択され、22年度からこのプロジェクトはスタートしたわけである。

【原始古代親族研究は新たな展開へ】　このプロジェクトで私は全体の総括とともに親族関係研究を担当している。前述のように、遺跡出土の人骨歯牙のストロンチウム同位体比からその人物の生育地を探っている。取りあえずは九大にある膨大な弥生人骨から開始しているが、すでに極めて興味深い結果が得られている。たとえば、小郡市の遺跡では、その遺跡へ結婚で移動したと考えられる人物が男女半々に近く、歯冠計測値で私たちが分析してきた「選択居住婚で双系の社会」という結論を支持する結果が得られている。また、幼児期に死亡した個体は乳歯と永久歯の双方が分析可能であるが、永久歯のストロンチウム同位対比はその遺跡で生育した値を示すものの、乳歯の値が他所生育者の値を示すケースがいくつかみられた。これらの乳歯は母胎内で形成され、永久歯は３歳代に形成された部位であるため、母親は他所で妊娠期を過ごし、出産後に移動してきたと考えられる。この事実は、婚姻の完成が出産後であり、それまでは夫が妻方に通う婚姻形態であったことを示唆するものである。つまり、日本古代の「妻問い婚」のルーツが弥生時代まで遡る可能性が出てきたのである。

また、下図の赤丸は分析を行った遺跡であるが、赤星で示した拠点遺跡を中心とする小地域をこえて通婚していたという結果が得られている。これまでの研究法では決して知りえなかった重要かつリアルな結果である。

今年度からは科研費（基盤A）も採択され、これから韓国・台湾の資料も加えて研究は進む。さらなる結果と研究の新展開が十分期待されるのである。



地球科学的精密分析手法の考古学への応用

小山内　康　人
（地域資料情報講座）

比較社会文化研究院では、第二期中期目標・中期計画において、「学際融合研究の推進」が謳われた。これに対応するため、考古学と地球科学が密接に連携した学際研究プロジェクトが組織され、九州大学 P&P や大型科研費などによる活発な研究活動を展開している。いわゆるハイテク考古学を凌駕し、世界最先端の考古学を目指すこの学際融合研究では、対象の考古資料について極めて高い精度での元素分析・同位体分析・物質相同定などが必要となる。本稿では、これらを行うための比文に配備された各種分析装置の概要と、今後の展望について紹介する。これまでに実施した分析の実例は、本特集の他の稿で紹介される。

1．考古資料の精密分析

約46億年におよぶ地球史の中で形成されてきた岩石・鉱物・化石などの地球科学試料について、その形成時代や形成の温度・圧力条件などを知るために精密な表面・内部観察、物質相同定、元素分析、同位体分析などが行われる。このような分析手法を埋蔵考古資料に応用することにより、個々の資料について正確なキャラクラリゼーションが可能となり、物質同定、原産地同定、製造過程、物流過程などが明らかになると同時に、これらに対応する人口移動や交易システムなどを明らかにすることが可能である。

現時点では、以下のような分析装置群を使用して分析・解析が行われている。

1）**形状・内部組織の観察**：実体顕微鏡、光学顕微鏡、超高深度デジタル顕微鏡、カソードルミネッセンス装置、走査型電子顕微鏡（SEM）、電子線マイクロアナライザー（EPMA）、ソフトX線等を使用して、資料の低倍～超高倍率（約30万倍）表面観察、3次元内部組織観察などを行う。現時点では、マイクロメートル（1μm=0.001mm）からナノメートル（1nm=0.000001mm）レベルの観察が可能である。

2）**物質同定・元素分布解析**：上記装置群に加え、X線回折装置（XRD）、蛍光X線マッピング装置、エネルギー分散型 EPMA および波長分散型 EPMA、顕微レーザーラマン分光装置などを用いて、考古資料の構成物質の同定や資料内における元素濃度分布を分析・解析する。

3）**元素分析・同位体分析**：レーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計（LA-ICP-MS）、EPMA、エネルギー分散型および波長分散型蛍光X線分析装置（XRF）、安定同位体質量分析計などを使用して、超高精度元素分析・同位体分析および資料構成物質の年代測定を行う。分析精度は国際的にも最高水準に達しており、元素濃度では ppb（10億分の1）～ ppt（1兆分の1）レベルの分析が可能となっている。ちなみに、%は1/100、ppm は1/1,000,000である。

2．代表的分析装置の紹介

比文における学際融合研究に使用されているいくつかの分析装置について、分析原理とその適用例を紹介する。

蛍光X線分析装置：物質にX線を照射したときに発生する蛍光X線を用いる化学分析法。物質を構成する原子には、中心の原子核の周囲に円形の軌道を持つ電子殻が存在し、内側からK殻、L殻、M殻、…、と呼ばれる。それぞれの電子殻には決まった個数の電子が存在する。照射X線によって内側の電子殻の電子が光電子としてはじき飛ばされた後の空孔に、より高いエネルギー状態をもつ外側の電子殻から電子が落下する。このとき、内側電子殻と外側電子殻のエネルギー差が、元素ごとに特有の波長をもつ蛍光X線として放出される。

現在は、波長分散型 XRF により、23元素（Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、V、Cr、Co、Ni、Cu、Zn、Ga、Rb、Sr、Y、Zr、Nb、Ba）の測定を行っており、土器・胎土、石器・石材の元素分析などに適用される。増設した蛍光X線元素マッピング機能により、直径30mmまでの資料について、非破壊で表面の元素濃度分布を測定することも可能である。

電子線マイクロアナライザー：蛍光X線分析と同様に、物質に電子線を照射したとき発生する、元素ごとに特有の波長をもつ特性X線を用いて元素分析を行う。比文に配備された波長分散型 EPMA には、世界最先端の電界放出型電子銃が備わり0.3～1μmの極微小領域の元素濃度を測定することができる。また、この装置はエネルギー分散型検出器も装備しているため、多元素を迅速に同時測定できるとともに、超微量濃度のB、N、O、Fなどの超軽元素、ランタン系希土類元素およびU、Pb、Thなどの重元素を精密に測定できる。

現時点では、石器・石材、青銅器等の金属資料、土器表面の顔料などについて、構成物質の元素分析、物質同定、組織観察に適用する。また、石器の構成鉱物であるモナズ石について、本装置を使用してEMP年代測定を行い、原

石産地の特定や物流後の石器・石材の同定などが行われている。

レーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計：近紫外線波長のレーザー照射（LA）により発生した気体（エアロゾル）に高電圧をかけて高温プラズマを生成し、超高純度アルゴンガスを混合して、誘導結合プラズマ（ICP）を発生させる。このICPを数1000～10000℃まで加熱してイオン化した元素を、質量分析計（MS）で同位体ごとに同定・定量する。なお、本装置はクラス100程度（1立方フィート当たりの塵の数を表す数値。晴天時の外気はクラス1,000,000程度に相当）のクリーン環境下で分析作業が行われ、超高感度・超高速分析を実施している。

ここでちょっと復習してみよう。同位体（Isotope）とは、同じ原子番号をもつ元素で、原子核を構成する中性子の数が異なるため、質量が異なるものをさす。例えば質量数16の酸素（^{16}O）は、陽子8個と中性子8個からなる原子核の周囲に、8個の電子（K殻電子2個＋L殻電子6個）が存在する。他の酸素同位体としては^{17}O（質量数17）と^{18}O（質量数18）があり、それぞれ中性子が1個および2個多くなったものである。これらは、天然界に一定の割合で安定に存在する安定同位体である。ちなみに、ストロンチウム（Sr）には^{73}Sr～^{105}Srの同位体があり、^{84}Sr、^{86}Sr、^{87}Sr、^{88}Srは安定同位体である。考古資料のうち歯牙や骨を用いた分析では、^{87}Srと^{86}Srを定量してその比を利用し、古代人の生活環境などを明らかにできる。一方、核分裂反応で生成される放射性同位体としての^{90}Sr（半減期28.78年）は、カルシウムの代わりに骨に蓄積され健康被害を引き起こす。放射性同位体とは、放射能を持ち、時間とともに電子・陽子・中性子を放出して原子番号が変化（放射性崩壊）する同位体である。

現在はこの装置を利用して、Sr、Rb、CaやLa、Ce、Pr、Nd、Sm、Eu、Gd、Tb、Dy、Ho、Er、Tm、Yb、Lu（希土類元素）、およびHf、Ta、Pb、Th、Uの定量・同位体分析を行っている。定量分析では、石器や土器の希土類元素組成から原産地や地域特性を明らかにし、古代人の歯の$^{87}Sr/^{86}Sr$比からは埋葬地域の地質との対応を考慮して、生活環境や人口移動・交易過程の解析を行っている。また、石材や土器中に含まれる鉱物（ジルコン）のPb、U同位体から年代値を解析し、石器原石や胎土の原産地特定を行っている。

顕微レーザーラマン分光装置：物質にレーザーを照射すると、物質を構成する分子が励起状態になる。この分子が元の基底状態に戻るとき、分子の振動によって極めて微弱なラマン散乱光が発生する。本装置では、顕微鏡下（～1000倍）で観察される微小領域で発生したラマン散乱光を検出し、微小物質の相同定、構造解析、均質性評価などを行うことができる。前処理不要で微小領域の非破壊分析が可能なことから、極微細な考古資料分析にも適用できる。共焦点顕微鏡を装備しているため、ガラス玉の製造過程で混入した内部異物の物質同定、土器表面の塗料解析などに威力を発揮している。

3．比文における最先端考古学の展望

考古学と地球科学（特に地質学・岩石学）の研究手法は、極めて類似する場面が多い。扱う研究材料が、岩石・鉱物（石材・金属）、化石（古人骨や骨）、地層（胎土）、およびその加工物だからである。考古学研究に様々な装置・機器分析の手法を導入し、蛍光X線分析などの地球科学分野でも利用される装置群や電磁波・X線CTなどの先端技術を駆使した考古学の新展開（ハイテク考古学）が提唱されたのは、1980年代であったと思う。これに先駆け、1970年代においても筆者が専門とする地質学･岩石学分野では、極めて微小な試料で分析可能な各種装置を駆使して、多様な研究展開がすでに始まっていた。特にEPMAの様々な研究機関への導入は、地球科学研究に対するエポックメーキングな大事件であった。その後今日に至るまで、EPMAや他の分析機器が大きく進化するとともに、地球科学研究に応用可能な様々な分析装置が開発されてきたにも関わらず、残念ながらハイテク考古学はそれほど大きな進展が無かったのではないだろうか。この理由として、（1）考古学では、埋蔵遺物・考古資料を非破壊で分析・解析することが求められること、また、（2）類似の研究手法が要求されるにもかかわらず、考古学の研究室と地球科学の研究室が、密接な学際融合研究を行うための条件が揃っていなかったこと、なども指摘できるかも知れない。

本稿で紹介した､比文における各種最先端分析装置では、上記（1）の問題に対し、完全非破壊あるいは準非破壊（破壊領域を特定することが困難な程度の微小破壊）で考古資料を精密分析することを可能にした。これはまさに、ハイテク考古学を越えるエポックメーキングな大事件が起きようとしていることを示している。また、上記（2）に関しては、このような学際融合研究は、学際部局としての比文だからこそ可能であり、国内・海外の研究機関を見渡しても比文以外では為し得ない研究スタイルと見なすことができる。今後は、このような多彩かつ先端的な成果を上げつつある考古学･地球科学の学際融合研究をさらに発展させ、国際連携研究を強化させて、アジアにおける埋蔵文化財・考古資料の最先端精密分析拠点を構築する必要があるのではないだろうか。

レーザー溶出型ICP-MSを用いた考古学資料の精密分析 ～これまでの経過と今後の展望～

中　野　伸　彦
（地球自然環境講座）

誘導結合プラズマ質量分析計（ICP-MS）は、超高感度の多元素同時分析装置として、地球科学分野では古くより使用され続けている。ICP-MS単体での分析では、酸もしくはアルカリによる試料の化学的溶融が必要となり、分析前の処理に多くの労力と時間を費やす。また、溶融が必要という意味では、分析結果はバルクでの組成となり、微細な組織に対応した分析は不可能であった。一方で、レーザー溶出型ICP-MSは、固体試料に短波長のレーザーを高出力で照射することにより、そこから発生したエアロゾルをサンプリングする。このことで前処理の労力や時間を大幅に軽減するとともに、レーザー径を絞り込むことによって、微細組織ごとの精密定量分析が可能である。ここでは、これらのレーザー溶出型ICP-MSの特長を生かし、考古学資料へ応用した例として、遺骨中の歯のストロンチウム（Sr）同位体分析法について述べる。最後に、現在取り組んでいる同装置を用いた他の分析法を紹介するとともに、今後の考古学資料分析の展望について記すこととする。装置の詳細や得られた分析値の解釈については、本特集の他の方々の解説を参照されたい。なお、ここではできる限り丁寧に解説したつもりではあるが、「分析手法の紹介」という本稿の性格上、一部の方には非常に読みづらく、理解しづらい内容となっているであろうことを先にお詫び申し上げたい。

Srには、84、86、87、88の４つの質量数の異なる同位体が存在する。このうち87/86比は、岩石によって異なる値をしめす。この違いが、河川水の同比を支配し、最終的にそれを飲料としていた古代人の骨や歯に蓄積される。一般に岩石中の87/86比は、より感度の高い表面電離型質量分析計（TIMS）を用いる。一方で、同装置での分析の場合、試料の溶液化が避けられず、考古学資料のような一般に非破壊分析法を用いる試料に対して不向きであるのは言うまでもない。一方、レーザー溶出型ICP-MSは、高出力レーザーで固体試料を掘削しながら移動し、発生するエアロゾルをHeやArガスによってプラズマへと導く。歯の分析の場合、100ミクロン径のレーザーを1秒間に20回照射し、分析終了まで（約120秒）に0.3ミリ程度移動させる。これを５～７回繰り返す。穴の深さは、約10ミクロン程度であるが、そういう意味では完全な非破壊分析とはいい難い。しかしながら、写真１にしめした通り、分析後の歯の掘削跡は肉眼で確認することができないほどのものである。これは、考古学資料に対する分析法として、優位性が極めて高い。

さて、現状ではSr同位体分析は軌道に乗っているが、設置後1年間は、様々な懸案事項があった。それは偏に国内外を含めこの分析手法が確立されていないためである。挙げればきりがないが、代表的なものは以下である。

１）　87ルビジウム（Rb）の干渉補正
２）　カルシウム（Ca）二量体の干渉の除去
３）　標準試料の選定
４）　測定条件の設定

ICP-MSは、プラズマを通ったエアロゾルがイオン化され、質量分離部で質量ごとに分けられた後、検出器でそれぞれの重さのイオンの数をカウントする。87Sr/86Sr比を求める過程で、最も邪魔な存在が87Rbである。Rbには85と87の同位体が存在する。一般に歯は300 ppm以上のSrを含む。それに対して、Rbの含有量はせいぜい1 ppm程度であるが、87Rbの存在比は比較的高く、無視することがで



写真１　分析後の歯。レーザーでの掘削跡は、全く確認することができない。

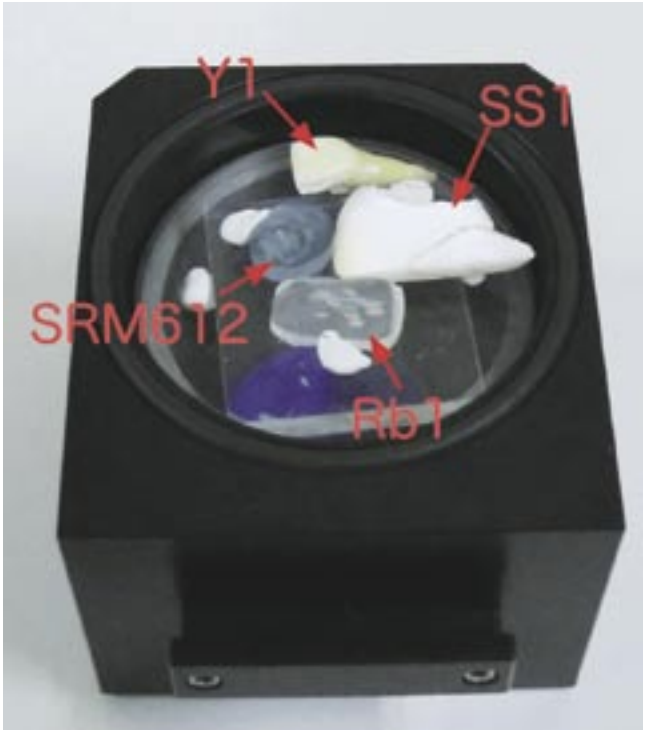


写真2　試料ホルダー上の標準試料。SRM612は定量分析時の標準試料。

きない。しかしながら、上述したICP-MSの特性上、87Srと87Rbを分離することはできず、理論的に補正するほか手立てがない。そこで、Rbのみを500 ppm加えた合成ガラス（Rb1）を作成した。このSrを含まずRbのみを含むガラスの87/85比を測定することにより、87Rbの干渉補正係数を算出することが可能となった。

歯はリン酸カルシウムから構成され、Caを多量に含む。Caには40、42、43、44、46、48の同位体が存在する。これらが相互に結合することにより、二量体というものを形成する。例えば、86Srや87Srに干渉するものとして、40Ca-46Ca（86）、42Ca-44Ca（86）、43Ca-43Ca（86）、43Ca-44Ca（87）が挙げられる。これらの妨害多原子イオンを除去するために、質量分離部の前に装備されているコリジョン・リアクションセルに不活性ガスであるHeを少量流す。これにより、ガスとイオンの衝突が生じ、多原子イオンが解離する。従って、質量分離部に二量体が入ることはなく、正確な87Sr/86Sr比を得ることが可能である。しかしながら、この衝突現象は当然、測定元素に対しても生じるため、Heガス流量が多いと87と86のカウント数が激減する。流量は度重なる基礎実験により決定した。

標準試料とは既知の値をもった試料であり、その値を基に未知試料を測定することとなる。標準試料の絶対条件は、試料全体が均質であることと未知試料（歯）に近い組成を有することである。標準試料の測定にはTIMSを用い、様々な試料から測定を試みた。代表的なものは、粗粒単結晶の方解石、アラレ石、燐灰石、羊の骨、貝殻、歯である。最終的に、最も均質な貝殻（SS1）を標準試料とし、現代人の歯（Y1）を値のチェックに使用している。

測定条件は、非常にファクターが多い。レーザーだけでも出力、レーザー径、1秒間のショット数、移動スピードなど、ICP-MSは、各質量の測定時間および測定の繰り返し回数等がある。現在は、最も効率よく、かつ正確な値が取得できるよう各条件の設定を終了した。

このように、装置導入後1年半が経過し、様々な困難がありながらも、Sr同位体分析は軌道に乗っている。現在は、さらなる分析手法の改良と学生への分析法の教育を行っている。

現在、遺骨の歯の同位体分析のほか、レーザー溶出型ICP-MSを用いた考古学資料の分析として、様々な取り組みが行われている。すでにルーチン化されているものの一部を紹介すると、(1) 土器・石器の微量元素測定。これは、蛍光X線分析装置と組み合わせることで、42元素の定量分析が可能である。(2) 土器・石器中のU-Pbを含む鉱物（ジルコン）の年代測定。これにより非常に高精度の原産地同定が可能である。(3) 歯の微量元素組成の測定。これには環境の指標元素であるヒ素・カドミウム・鉛等が含まれる。

これらに加え、鉄器・青銅器・勾玉・ガラス玉中の不純元素の定量分析手法の確立を目指し、日々基礎実験が続けられている。このように、高感度かつ高空間分解能をもつレーザー溶出型ICP-MSを使用することにより、ほぼ非破壊で様々な分析に対応することが可能であり、今後の考古学分野において画期的な進展が期待される。



写真3　試料ホルダー上の未知試料。

電界放出型電子線マイクロアナライザーを用いた考古学石材資料の年代測定

足　立　達　朗
（地球変動講座）

電子線マイクロアナライザー（以下、EPMA）は電子線を試料に照射し、そこで発生する特性X線の波長と強度を計測することによって、数μm以下の微小領域における数十ppmの元素分析が可能な装置である。比較社会文化研究院には、電界放出型電子銃（以下、FE）を搭載したFE-EPMAが2010年3月に設置された。FEは、他のタイプの電子銃と比較して、非常に細い電子線を照射することができる。そのため、最小で1μm以下の領域を分析でき、極微細な物質の化学組成を高精度で定量することが可能である。



図1　比較社会文化研究院設置のFE-EPMA（JXA-8530F）

地球変動講座では、FE-EPMAの設置と同時にウラン（U）-トリウム（Th）-鉛（Pb）EPMA年代測定法を立ち上げた。この年代測定法は名古屋大学のグループが開発した手法で、同位体分析を行わずに元素含有量のみから年代を計算するのが最大の特徴である。その原理を以下に記す。

天然のThは質量数232の核種を主とし、Uは主に質量数235と238の核種からなる。これらの放射性核種はα壊変とβ壊変を繰り返し、最終的に^{232}Thは^{208}Pbに、^{235}Uは^{207}Pbに、^{238}Uは^{206}Pbに壊変して質量数の異なる壊変起源Pbを生成し、鉱物中に蓄積される。壊変の割合は、核種ごとに一定であるため、ある経過時間の後で蓄積される各Pb同位体量と、ThとU同位体の現在の量は、時間の関数として表される。Uには^{235}Uと^{238}Uという2つの同位体が存在するが、その比が^{238}U/^{235}U ≒ 138であることを組み込むことで、全U量から生成されるPb量を計算することができる。前述のようにThは主に^{232}Thからなり、同位体は考慮しなくて良い。これらのことに基づいて、鉱物中に含まれる全Pb量と全Th量、全U量の関係は最終的に、

$$Pb = Th\left\{\exp(\lambda_{232}t) - 1\right\} + U\left\{\frac{\exp(\lambda_{235}t) + 138\exp(\lambda_{238}t)}{139} - 1\right\}$$

（tは経過時間、λは各質量数の核種の壊変定数）というように時間tの関数として表すことができるようになる。鉱物中の全Pb量、全U量、全Th量はEPMAで分析できるため、同位体分析をせずに年代値の計算が可能となる。

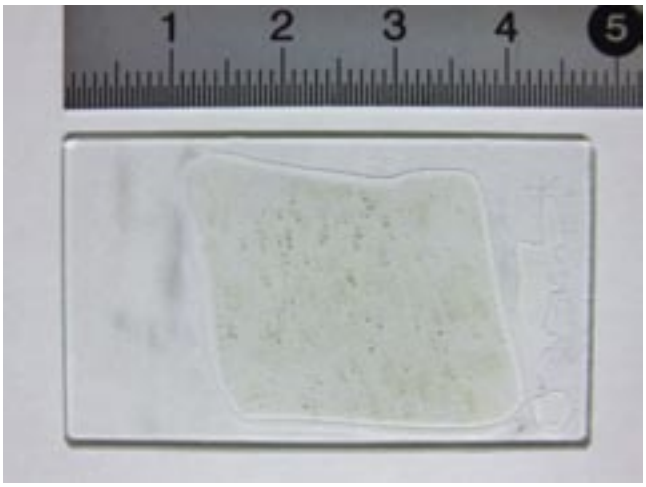


図2　FE-EPMA分析用の鋳型石材の岩石薄片。数cm角の試料があれば、鉱物化学分析、年代測定などの分析が可能。

一般に、同位体分析に基づく年代測定は、二次イオン質量分析計（SIMS）などを用いる。SIMSなどを用いた年代測定は、分析の熟練が不可欠で、技術的なハードルが高い。また数百グラムの岩石を粉砕して、年代測定に用いる鉱物を抽出する必要があるため、非破壊が原則である考古学資料には不向きである。一方でEPMAは、地球科学の分野では広く普及した装置であり、分析方法も確立されている。また、

数cm角の試料から岩石薄片を作成すれば実施でき、なおかつ1μm前後の鉱物から年代値を得ることができる。このことは、地球科学分野における微細鉱物の分析はもちろん、資料の加工を極力避けなければならない考古学分野の分析にとっても大きなアドバンテージとなる。

U-Th-Pb EPMA年代測定は、%オーダーのThやUを含むモナズ石やジルコンなどの副成分鉱物を対象とする。これらの鉱物は、多くの場合50～200μm前後の微細結晶であるが、多くの火成岩、変成岩、堆積岩に含まれるため、様々なタイプの岩石試料から年代を得ることが可能である。またこれらの鉱物は二次的な変質や変形に対する耐性が強いため、岩石の本質的な情報を引き出すことができる。さらにモナズ石やジルコンは、年輪のような成長層（累帯構造）を示し、複数の地質イベントの情報を記録していることがある。FE-EPMAの持つ高い空間分解能によって、各成長層の年代が決定できれば、より精密な解析や比較が可能となる。

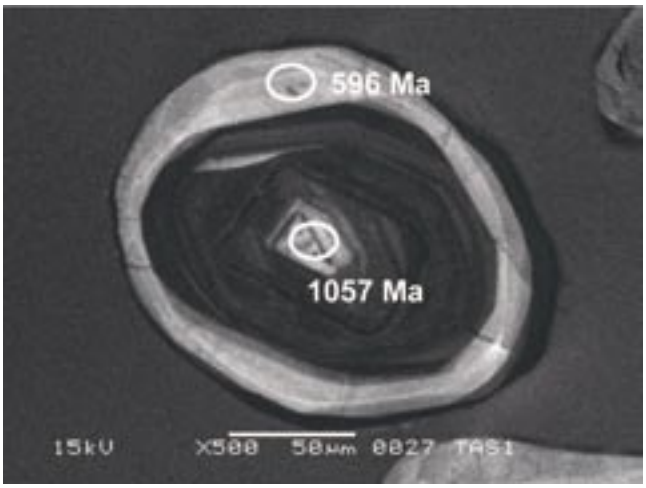


図3　鉱物の累帯構造の例。年輪のように同心円状に成長している様子がわかる。結晶の核部は約10億年前に、縁辺部は約6億年前に形成されたことを示す。Maは100万年前を示す単位。

今回は、北部九州において弥生時代の青銅器生産に用いられた鋳型石材の原産地推定を目的として、U-Th-Pb EPMA年代測定を考古学的資料に適用した。青銅器の生産に必要な鋳型は、石製と土製に大別できるが、北部九州では石英長石斑岩という岩石からなる石製鋳型が多く発見されている。この岩石は筑肥山地・三郡変成帯中の岩脈、矢部川流域・八女市周辺の河原の転石として採取できることが明らかにされてきた。しかし、これまで鋳型石材および採取された岩石について、肉眼および偏光顕微鏡観察に基づく比較は実施されてきたが、鉱物化学分析、全岩化学分析、年代などの精密分析に基づく比較は行われていなかった。そこで本プロジェクトでは、埋蔵文化財調査室所蔵の鋳型石材と、筑肥山地の岩脈および矢部川の河原で採取した転石について精密分析を実施した。なお、分析結果の詳細は本特集・田尻義了氏の稿を参照いただきたい。

石英長石斑岩からなる鋳型石材、岩脈、転石は非常に細粒の鉱物から構成されており、含まれるモナズ石はほとんどが20μm以下であった。これらのモナズ石に対してU-Th-Pb EPMA年代測定を実施したところ、岩石の形成年代は全ての資試料において約1億2千万年前で一致することが判明した。また、岩石組織、鉱物組み合わせ、鉱物化学組成、全岩化学組成などの岩石学的特徴も一致することから、地球科学的観点からはこれらの試料が異なる岩石であるというのは極めて困難である。また上記の資試料に加え、筑肥山地からほど近い耳納山地・北部に分布する草野花崗岩に含まれるモナズ石のU-Th-Pb EPMA年代測定を行ったところ、約1億500万年前の年代が得られた。このことは、草野花崗岩と筑肥山地の石英斑岩とは形成された時期が異なることを意味し、草野地域は鋳型石材の原産地とはみなせないことが確認された。このように、本プロジェクトによる精密分析によって、鋳型石材の原産地は筑肥山地の石英斑岩であることがほぼ特定できたと考えられる。

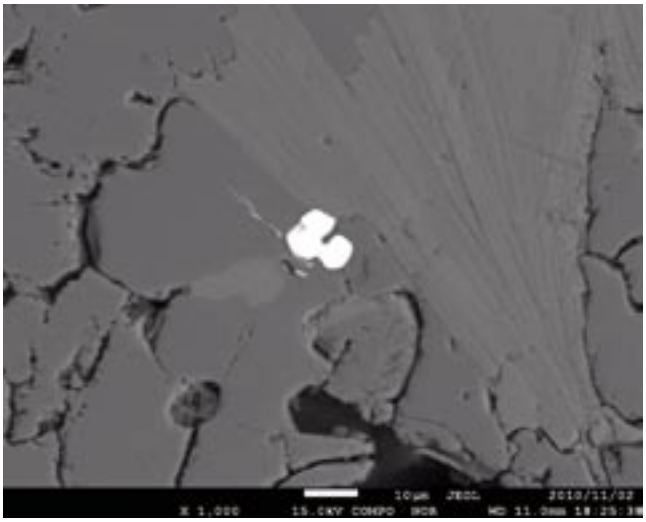


図4　U-Th-Pb EPMA年代測定を実施した、鋳型石材に含まれるモナズ石の電子顕微鏡画像。中央の輝度の高い鉱物がモナズ石である。画像下部の白色のバーは10μmを示す。

年代値というのは、地球科学的、考古学的な各種現象が起きた「時」を表し、あらゆる現象の変化を記録するための重要かつ基本的なデータの一つである。U-Th-Pb EPMA年代測定は、同位体分析に比べて簡便で、しかも圧倒的に微小領域の分析が実施できる。これらの利点を最大限に生かし、地球科学および考古学現象に対して精密に「時間軸」を加えることで、より合理的な議論が可能になるものと期待される。

弥生時代の青銅器製作用石製鋳型の原産地･採石･加工場発見!!

田　尻　義　了
（埋蔵文化財調査室・学術研究員）

弥生時代は日本列島で初めて金属器が使用された時代です。

なかでも、青銅器は弥生時代を象徴する資料のひとつであり、様々な研究が進められています。弥生時代の青銅器は朝鮮半島から伝来し、その後日本列島でも製作されます。青銅器の製作方法は製品の形を彫り込んだ鋳型を組み合わせ、その中に溶解した青銅を流し込むものです。鋳型の材質には石製と土製がありますが、朝鮮半島から日本列島に伝わった当時は、石製の鋳型だったようです。

弥生時代中期（B.C. 3世紀頃）に朝鮮半島から青銅器製作技術が伝わった当時は、朝鮮半島で使用していた滑石などと同じ石材を求めて、様々な岩石を鋳型として使用しますが、しばらくすると石英斑岩と呼ばれる石材に統一されます。この石材を使用した鋳型が、これまでの発掘調査の結果、福岡平野を中心とする北部九州で250点ほど確認されています。

近年の研究では、この石材の産地に関して、矢部川中流域（福岡県八女市）で産出するのではないかと指摘されていましたが、岩石の肉眼観察に留まっており、科学的な調査が実施されておらず、また考古学的にも矢部川流域の状況が不明であったため疑問が投げかけられていました。そこで、今回のP&P研究の一環として、考古学と地球科学の融合を目指して、対象となる岩石の科学的調査を実施しました。

対象資料は、九州大学埋蔵文化財調査室所蔵の九州大学筑紫地区出土の中細形銅戈鋳型と矢部川の河原で採取した石材です。分析方法は、地球変動講座に設置されているEPMAを用いた鉱物組成分析、XRF、LA-ICP-MSを用いた希土類元素を含む化学組成分析、対象資料内に副成分鉱物として包含されるモナズ石の生成年代測定です。

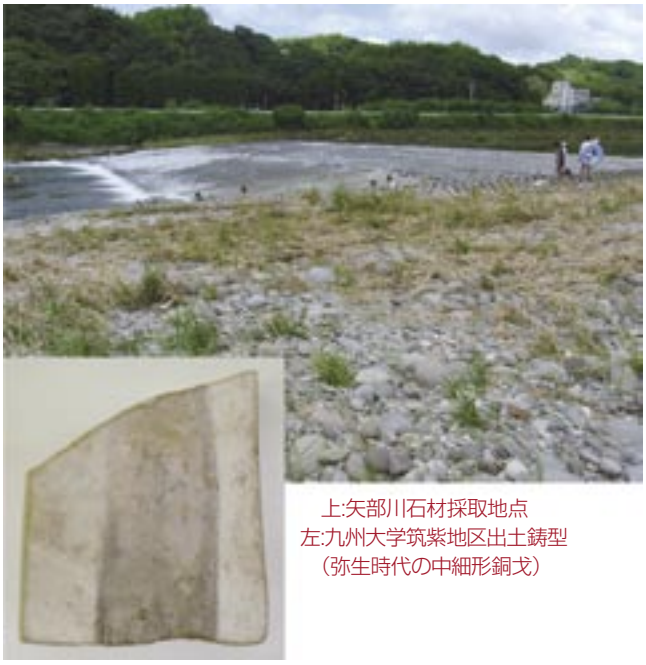
分析の結果、鋳型に使用されていた石材と矢部川で採取した石材は、全ての分析項目で一致しました。この結果は、弥生時代に矢部川中流域で採取した石材を用いて、青銅器の鋳型を製作していたことを示しています。考古資料の分析に地球科学で用いる分析手法を用い、見事に融合させた成果と言えるでしょう。

しかしながら、矢部川中流域においてはこれまで弥生時代の集落などの状況が不明瞭で、弥生時代の石英斑岩の採石･加工場に関しても具体的な情報が不明でした。そこで、これまでに発掘調査された遺跡から出土していた資料の再調査を実施しました。

その結果、1992年に調査されていた矢部川に接する北山今小路遺跡（八女市立花町）出土資料の中に、200点を超える石英斑岩製の出土品が存在していることがわかりました。北山今小路遺跡は弥生時代集落遺跡で、出土資料を丹念に調査すると、石を割った際にできる剥片が多く含まれており、石英斑岩の母岩を集落内で割っていたことが判明しました。

そこで、北山今小路遺跡出土の資料を、鋳型の分析と同様の方法で分析したところ、データが一致するという結果が得られました。これらのことから、弥生時代の青銅器生産に用いる石製鋳型は、矢部川中流域の河原で採取・採石した石英斑岩を北山今小路遺跡で大まかに荒割りし、鋳型素材として福岡平野などの青銅器製作地へ運ばれていたことが明らかとなりました。

考古学と地球科学の共同研究により、これまで把握されていなかった弥生時代の石材物流ネットワークの一端が解明されました。この成果は、これまで弥生時代研究において、あまり重要視されてこなかった矢部川流域に対するフィールドイメージを変えるとともに、当時の広域社会ネットワークの存在を明らかにしました。現在、九州大学埋蔵文化財調査室では約200点の北山今小路遺跡出土品の整理作業を進めています。今後の成果報告にご期待下さい。



上:矢部川石材採取地点
左:九州大学筑紫地区出土鋳型
（弥生時代の中細形銅戈）

土器からみた弥生時代の「ご近所づきあい」

石　田　智　子
（基層構造講座・学術研究員）

北部九州地域は、先史時代以来非常に韓半島との関係が強く、東アジア世界と日本列島をつなぐ結節点でした。特に弥生時代中期になると、日韓海峡を越えたモノ・ヒト・情報の相互交流が活発化し、金属器や渡来人が北部九州地域に流入します。このように社会が大きく変化する時期に、「いつもの暮らし」や「昔からの人間関係」はどのように対応したのでしょうか。このような日常生活の変化を知るためには、最も日常的な道具である土器の研究が有効です。

弥生時代には、土器を場面に応じて多様に使い分けました。食糧や水を蓄え（貯蔵）、食事の準備をし（調理）、料理を盛り付けます（食器）。物資調達時は、近くの集落まで交換物を運び、獲得物を入れて持ち帰りました（運搬）。また、葬式の際には、遺体を納め（甕棺）、葬祭道具としての土器を廃棄してから日常生活に戻ります。土器は、生活のあらゆる場面に関係する、オールマイティな道具でした。そして、最終的に役目を果たして捨てられた土器は、二千年の時を越えて発掘された結果、考古学者の研究対象資料となります。

では、そもそも土器はどこで作られ、どのように持ち運ばれたのでしょうか。これは意外と難題です。これまで考古学では、土器の形態や文様の分析を通して、複数平野に渡り一定の共通性を持つ範囲を「地域的まとまり」として認識してきました。しかし従来の考古学的手法では、「地域的まとまり同士の関係」は分かっても、「地域的まとまり内部の関係」にはアプローチできませんでした。大きな共通性に含まれる細かな差異を識別することができなかったからです。そのため、最も頻繁に行われた平野内レベルの土器の移動については言及されてきませんでした。

土器の形態ではなく材質に着目する研究視点が、自然科学的分析手法を土器に応用した胎土分析です。弥生土器は、近くに存在する粘土・砂粒などの資源を利用した集落ごとの個別生産が想定されるため、土器の胎土には居住地周辺の基盤地質の特徴が反映すると考えられます。これを踏まえて、土器の原材料採取地点の特定が進められてきましたが、従来の測定機器や分析手法の精度では「地域レベル」の推定に留まり、考古学側から求められる「地域的まとまり内部」の様相把握につなげることができませんでした。

このような背景の下で、P&Pプロジェクトにおける土器の胎土分析研究は開始されました。比較社会文化研究院には、考古学者が求めるレベルに応え得る高精度の測定機器が整備されており、その算出データは逆に考古学における形態学的研究の深化を刺激します。本研究で特に注目されるのが、LA-ICP-MSによる希土類元素（レアアース）組成に基づく成果です。従来指摘されてきた以上に、土器の胎土が地質に応じた細かな地域差を示すことが明らかになりました。その結果、平野内の同一河川流域に所在する約５km間隔の遺跡から出土した土器の胎土の違いが識別でき、さらには近隣遺跡間で土器が移動している可能性も指摘されます。これは、各集落で個別に粘土を採取して土器を製作していた実証的裏付けだけでなく、近隣集落間で頻繁にヒトが行き来していた可能性、いわば弥生時代における日常的な「ご近所づきあい」の様相解明に結びつく成果です。

土器がどこで作られ、どこに移動したのかを知るためには、大量の土器の分析に基づくデータベースの整備が不可欠です。多くの資料所蔵機関の協力を得て、土器の胎土分析は現在進行中です。本研究の遂行により、膨大な出土量のために軽視されがちな土器破片資料でも、新たな分析手法の適用により地域社会の歴史理解に貢献できる可能性が提起されます。

写真は、韓国・東亜大学校博物館で勒島遺跡出土土器のサンプリングをするP&Pプロジェクトメンバーです。勒島遺跡は、韓半島南部地域における弥生人の活動の痕跡が残る重要な遺跡です。弥生人が日常レベルの関係を越えて東アジア世界への積極的参入を開始した時期に、北部九州地域のどこの弥生人が韓半島で活動し、どのように交流したのか、土器を研究することでその答えの糸口が見える予定です。



青銅器分析成果速報

岩　永　省　三
（総合研究博物館・基層構造講座兼担）

当プロジェクトでは、中国戦国～前漢、弥生時代～古墳時代の青銅器について、反射顕微鏡観察、反射電子像観察、SEM-EDSによる定性分析を行った。分析の流れは、A）樹脂で包理、B）面だし、鏡面研磨、C）反射顕微鏡で観察、相や組織を把握、D）SEM-EDSによる定性分析、EPMAによる微小領域元素分析である。分析成果の一部を速報する。

※　分析資料　※

製作年代が古い順に、種類・出土地・所蔵者を記す。

①戦国式銅剣・出土地不詳・総合研究博物館

中国戦国時代に製作された身と柄を一体に作る銅剣。

②前漢鏡・福岡県須玖岡本Ｄ地点・人文科学研究院

異体字銘帯鏡ないし昭明鏡の可能性が高いが断定はできない（宮本一夫氏教示）。

③細形銅剣・福岡県須玖岡本・総合研究博物館

弥生時代前期末～中期に見られる。半島製か列島製か形態から識別するのは難しい。

④鋤先・九大春日地区出土・埋蔵文化財調査室

⑤鋤先・九大春日地区出土・埋蔵文化財調査室

④⑤は弥生後期に北部九州に特徴的に見られるもの。広形銅矛・小型仿製鏡と同様に粗製品が多い。

⑥小型仿製鏡・佐賀県小長崎山１号墳・人文科学研究院

※　金属組織の差　※

反射電子像で組織をみると、中国製の①②と半島ないし列島製の③以下では金属組織に大差がみられる。

①戦国式銅剣のメタル部分は、銅―錫合金の初晶α相が樹枝状に発達し、その隙間をやや酸素が増えた共析組織が埋め、最後に結晶化した鉛がスポット状に分布している。典型的鋳造組織が見られる。錆部分ではその程度によって状況が異なるが、錆化が進んだ部分では組織が崩壊している。

②前漢鏡は、鉛を含まず、銅―錫のスポット状の初晶の周囲を微細な共晶組織が埋め尽くしている。

①②からみて中国製青銅器は十分な合金化が成し遂げられていると言えよう。

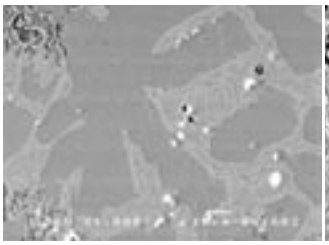
これに対して、③細形銅剣のメタル部分は２ヶ所（A・B）を分析したが、状況に大差がある。Aは銅が微量で錫―鉛主体の合金であり、鉛の樹状組織の間を錫が埋め、微細な銅粒子が散在する。この部分だけ見れば銅剣でなく錫剣である。これに対して、Bは酸化銅を主成分とし、他の金属を含まない。A・Bの様相から見ると、坩堝に銅・錫・鉛の材料を入れて溶かした際に、錫・鉛が先に溶け銅が十分に溶けきらずに底にたまった時点で注湯したため、注入初期には錫―鉛合金が入ってAとなり、遅れて銅が入った部分がBと考えられる。溶解時に坩堝内の温度が十分上がらず、合金化が不十分であったと言えよう。この技術的拙劣さは中国青銅器に比して際立つが、この個体の特性か、列島製ゆえか、半島製でもそうなのか、さらに資料数を増やして確認する必要があろう。

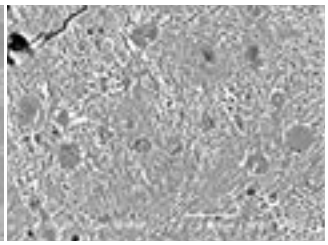
④鋤先では、中心部分でも、90％以上の銅からなる部分と、鉛主体の部分とがはっきり分かれており、合金組織をなしていない。⑤鋤先では、ほとんど銅からなり合金ではない。この④⑤の状況は、弥生後期の青銅器の一般的状況である可能性があるが、①戦国式銅剣の錆部分の状況と似ていることから、④⑤がほとんど錆化した部分を分析した可能性もある。広形銅矛・小型仿製鏡など分析例を増やしたい。

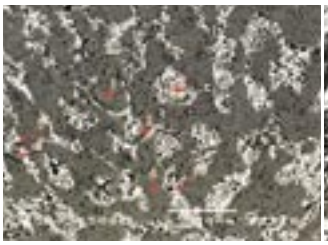
⑥小型仿製鏡は、銅―鉛合金で、鉛の含有量が多いが、合金組織は見られず、スポット状に鉛が分布する。

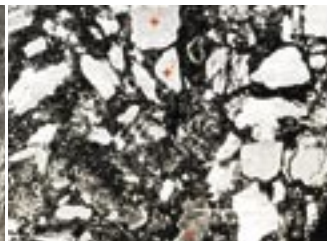
※　ヨウ素の検出　※

④鋤先の破片２点のうち１点には、表面近くにスポット状に多量のヨウ素を含む部分がある。離型剤・塗型剤の可能性はあるが④の他の破片や⑤では検出されず、農薬・肥料などによる汚染の可能性もあるが、ヨウ素は金属組織内にスポット状に点在しており、さらに検討を要する。なお、現在の鋳造では離型剤・塗型剤として油煙・黒鉛（graphite）・雲母（mica）・蛭石（vermiculite）などを用いる。


①の金属組織


②の金属組織


③の金属組織Ａ部分


③の金属組織Ｂ部分

○○○ 博士論文を書き終えて

博士論文を書き終えて～私の17年

佐　藤　秀　信
（国際社会文化専攻）

「明日は来（こ）れるんか・・・。」病室を出ようとしたときに聞いた弱々しい言葉が最後だった。その夜、意識不明となった父は、２週間後、私の31回目の誕生日に逝った。

自分の人生の有り様を方向づける出来事というのは、おそらく誰にでもあるのだろうが、私にとってそれは、このとき目の当たりのした父の「死に様」だったように思える。膵臓癌を患い、五臓六腑の多くを摘出したにもかかわらず、６年間に及ぶ闘病生活を通して、在比日本軍憲兵隊員に対する戦争裁判の実像を必死に追跡 ――『一死、乱れず』潮出版社、1991年（第10回潮賞ノンフィクション部門優秀作受賞）―― した父の最後は、私に生きることの意味を考えさせた。

父が集めた英文裁判記録については、教職についたばかりの私も、時折、翻訳を手伝っていた。高校で世界史を教えていたこともあり、その内容について相談を受けることもあった。ただ、戦争裁判に関する基本的な知識のない私が、あらためて遺された約5,000頁に及ぶ記録を前にすると、父の死に際して抱いた「遺志を継ぎたい」、「自分も何か生きた証を残したい」との思いが、萎靡するのを感じずにはいられなかった。

そんなとき、私の気持ちを支えたのが、母の姿であった。食事の管理からインスリンの注射にいたるまで、献身的に父の「生」を支えた母に、息子として何かしてあげたかった。父の思いを継ぐことで、母を喜ばせたいと思った。私は、少しずつ、マニラで行われた戦争裁判（米軍管轄）の記録を読み進めていた。

日常生活の中で、私が心がけたのは、常に自分の無知を自覚することだった。正直なところ、先生と呼ばれる立場にいると、物事を客観的・複眼的にとらえられなかったり、他者の優れた点を過小評価したりする場合がある。自惚れや錯覚は、決して自分の能力を高めない旨、肝に銘じ、研究目的が明確化し追究に必要な力が身につくまでは、あせらず堅実に、知識や技量の向上に努めようと考えた。



父の遺作


文部省事業で派遣された米国の高校での特別授業（1998年）

最初に取り組んだのは、語学力を高めることだった。学部時代は、史学科で西洋史を専攻していたこともあり、読解に対する不安は少なかったが、裁判記録の分析を進めるにあたり、オーラルについて十分な力を身につけなければならぬことは明らかだった。中学生が使う英文参考書から始め、不明な点は、同僚はもちろん教え子たちにも、躊躇なく尋ねた。安価な受講料さえ払えば誰でも参加できる地域主催の英会話教室にも顔を出し、会の世話人となるなかで外国人講師（CIR、ALT）との面識を広げるとともに、国際交流団体から依頼を受けたホームステイ等は、すすんで引き受けた。勤務先の学校では、各国から集まった留学生への日本語指導や担任業務、姉妹校との交流活動に携わることで、自分の専門分野以外の知識や実践を身につけるよう留意した。結果として、彼らが皆、私にとっての語学教師になった。

２点目に留意したのは、日々の生活の有り様を工夫することだった。簡単に言えば、努めて単調な生活、同じことを同じように繰り返す日常を意識したのである。「継続は力なり」との言がしばしば使われるが、習慣化するまで私が最も苦しんだのが、この点だった。言うまでもなく、社会人として、仕事を抱えながらの日常では、時間の使い方を工夫する必要がある。ただ、単調であることは決してナイーヴ（naive）であることを意味しない。問題の優先性（priority）を念頭に物事に取り組み、時間の使い方を操作することが大切である。多忙を嘆くのではなく、意図して時間を作らなければならない。

そして、３点目に留意したのが、目標を持つことだった。

自分の能力を客観的に評価し、一定の努力をすれば克服できそうな課題を常に意識するとともに、その達成のために必要な条件について考え、一日を暮らす目的を定めた。そのうえで、自分の努力が開花する日が来るのを信じるよう心がけた。

不思議なもので、こうしたことをしばらく繰り返していると、それまでの自分にはなかった力が次第に身についてきていることを自覚できるようになった。最初に述べた語学力に関して言えば、ある日突然、「喋れるようになっている」自分に気がついた。私は博士論文を書き上げるまでに、程度の差こそあれ、４カ国語の学習を進めたが、このような「気づき」が、語学学習に対する不安を軽減させたことは疑いない。また職場での教科指導でも、ポイントを絞って授業をわかりやすく展開する「ゆとり」が生まれた。日々の生活を工夫し、そこで達成した「喜び」―― それは、決して自惚れや錯覚ではない ―― を、学習の糧にすることが大切なのだろう。

さて、私が戦争裁判の記録分析に基づく研究を本格的に開始したのは、42歳の時だった。10年に及ぶ時間を経て、すでに研究目的が明確化していたこともあり、大学院へ進学することで、我流ではない実証分析を進めたいと考えた。

以下、大学院での生活で留意したことをあげてみる。

まず、修士課程の段階から、博士論文執筆を意識すること。当初から博士課程への進学を希望していたため、修士論文については、博士論文執筆の土台と考えた。したがって、博士号取得までの研究計画についても、修士課程入学当初から留意し、必要に応じて修正を試みた。先行研究や1次資料収集には細心の注意を払い、戦争裁判研究の全体像と実際行われた裁判の詳細を早期に把握することで、博士課程での研究がスムーズに行える環境を整えた。

２点目は、研究と仕事の両立を、それまで以上に徹底すること。具体的に言えば、睡眠時間を４時間半とした。私の場合、これ以上長くても短くても、両立には不都合が起こることが多かった。帰宅後はできるだけ早く寝て、深夜から早朝まで机につく。そのまま仕事に出かけて、同じパターンを繰り返すのである。家族に迷惑をかけるので、あまり勧められることではないが、時間を節約するために、車の中でパンをかじり、帰宅後、入浴のみを済ませて、すぐに寝ることも多かった。

３点目は、教官や院生、職場の同僚、そして家族に感謝すること。特に社会人学生の場合、どんなに気をつけても、仕事を優先しなければならない事態が起こりうる。私のように遠隔地（大分県）に住んでいる場合は、なおさら不都合が生じやすい。そんなとき、結局迷惑をかけるのは、こうした方々である。私は今、学校現場を離れ、教育行政に関わる仕事をしているが、帰宅が深夜になることも多く、博士課程３年次は、ほとんど登校できなかった。それでも、結果的に３年間で博士論文を完成できたのは、親身になって指導していただいた先生方、ゼミでの発表や論文の提出に関わる手続き等に協力してくれた院生ら、多くの皆さんのおかげと、心から感謝している。



教職員研修の講師として話す筆者

気がつけば、博士論文をまとめるまでに分析した英文１次資料は、20,000頁を越えていた。父が遺した5,000頁の裁判記録に対して感じた17年前の不安は、いつの間にか消えていた。「遺志を継ぐ」という個人的な思いから始めた研究活動であったが、これからは、これまで身につけた知識や経験を、教育現場に還元していきたいと考えている。おそらく、そうした「志」を持つことが、父のいう「明日」に繋がることだろう。



現在の職場にて

本稿をまとめるに当たり、世話人教員である松井康浩先生、高田和夫先生からご教示を仰ぐ機会に恵まれたこと、そして、折にふれてお世話になった皆さん、さらには、決していい父親ではなかった私を応援してくれた子ども達、両親に、あらためてお礼申し上げたい。

○○○ 博士論文を書き終えて

多くの出会いに支えられて

乗　松　　優
（比較社会文化研究院特別研究者）

博士論文では、1950・60年代に人気を博したプロボクシング東洋選手権を取り上げました。そもそも、私がスポーツを題材に選んだのは、高畑幸さんの「プロボクシングとエスニシティ――フィリピン人ボクサーはなぜ負けるのか」（2000、『スポーツで読むアジア』、世界思想社）を手にしたのがきっかけです。1990年代初頭から、日本でフィリピン人ボクサーの招請数が増加するようになりましたが、彼女はその要因を経済格差によるスポーツの国際分業化に求めました。我々は、体重による打撃力の差を解消するために階級制が取り入れられたボクシングを、最も平等性が約束された近代スポーツと考えています。しかし、高畑さんによれば、一部のフィリピン人ボクサーは、将来を有望視された日本人選手に試合経験と勝ち星を積ませる役割を担っているといいます。



日比間で国交がない時代から、両国の興行に関わったラウラ・エロルデさんは、私を歴史の世界へと誘う「水先人」であった（2005年9月19日撮影）。

私自身、大学時代からボクシングに関わってきたので、彼女の指摘には大変驚かされました。それと同時に、フィリピン人選手が専ら、日本人の対戦相手に選ばれるのには、何か歴史的な必然性があるのかと疑問を抱くようになったのです。幸いなことに、私は日本ボクシング・コミッションを始め、東洋王者であった金子繁治氏、勝又行雄氏、三迫仁志氏、矢尾板貞雄氏、世界王者であった沼田義明氏などに聞き取り調査を行うことができました。また、数々の世界戦を手がけたジョー小泉氏の協力を得て、フィリピンにも調査の足掛かりを作ることができました。世界チャンピオンだった故フラッシュ・エロルデの親族にお会いできたのは、私の研究を大きく前進させました。というのも、エロルデ家は、歴代の比国大統領と深い繋がりを持つほど。フィリピンのスポーツ界では名門中の名門だったからです。エロルデ夫人であるラウラさんや国際マッチメーカーであった故ロッペ・サリエルのご子息、ジュン・サリエル氏からは、日比間で戦後の文化交流が存在しないとされた定説を覆す史料や証言をいただきました。私は、こうした方々とのお付き合いを通して、足かけ10年にも及ぶインタビューと史料調査を続けてきました。

ここで、研究の内容を簡単にご説明したいと思います。日本で戦後のスポーツと言えば、力道山によるプロレスが代表的です。多くのスポーツ研究者は、朝鮮出身者である金信洛（キム・シルラク）が「日本人」として白人レスラーに空手チョップを浴びせかける姿に、戦後の倒錯した日米関係を重ね合わせました。しかし、同時期に反日感情が根強く残るアジア各国で、「東洋一」を賭けて戦ったボクシングは長い間、人々の記憶から抜け落ちていました。私はこの事実を非常に不可解に思います。帝国日本は戦前、朝鮮や台湾を植民地下に置き、南進政策によって東南アジアへも日本の占領地域を広げようとしました。大東亜共栄圏という空虚な理想を立ててまで、アジア各国に影響力を行使しようとしていた日本人は、敗戦によってその欲望を直ちに解消することができたのでしょうか。私は、この問題に対して、ひとつの仮説を立てました。すなわち、公の場であけすけな政治的言動が許されなかった戦後、アジアとの交流を可能にしたボクシングは、既存のナショナリズムを今しばらく延命させたのではないかということです。よく知られているように、占領期間中、戦犯裁判や公職追放によって、日本社会から国家主義の一掃が目指されました。戦前、盛んに新聞紙面を賑わせた東亜や大東亜ですら、何か特別な理由がなければ口にすることもはばかられる「汚れた」言葉となったのです。そうした時代、ボクシングが掲げた「東洋」は、日本人が改めてアジアに回帰し、自らのアイデンティティを確立する上で、非常に有効な枠組みであったと思います。

さらにもう一点、私が興味深いと思ったのは、フィリピンとのボクシング交流が戦犯裁判や賠償交渉と並行していたという点です。東洋選手権に多くの選手を送り出したフィリピンは、日本が国際社会に復帰する上で最も重要

な「キーマン」でした。第二次世界大戦中、日米の戦闘に巻き込まれたフィリピンは111万人もの国民を失い、ワルシャワに次ぐ都市破壊を被りました。この被害の甚大さは、1951年のサンフランシスコ講和会議に出席したフィリピン代表、カルロス・ロムロ外務長官に「フィリピン側が対日敵対感情を捨て去るには一世代を要する」とまで言わしめる程でした。しかし、戦争によって閉ざされた日比関係は、ボクシングの国際大会によって再び動き始めます。特に、フィリピン人選手の持つ洗練されたテクニックは、打撃一辺倒だった日本のボクシング界に一陣の風を吹かせました。というのも、フィリピンはアメリカ植民地時代に、地下興行を通して本場のボクシングを習得していたからです。1923年には、パンチョ・ビリャというフライ級のボクサーがアジア人として初めて、世界王座に上り詰めました。故白井義男が日本人として初めて世界王者になったのは1952年ですから、フィリピンのボクシング界は日本よりも30年近く先んじていたことになります。戦後の日本人ボクサーは、遙か彼方にあるフィリピン人選手の背中をぼんやりと見つめながら、世界レベルの技術をひとつひとつ学んでいったのです。



日本人戦犯の釈放を受けて開催された記念大会（1953年8月8日）。戦後のボクシング界が、冷え切った日比関係に介入していったことを示す一枚。

このように、私は博士論文の中で、日本のスポーツファンが東洋選手権によってどのようにナショナリズムを高揚させたのかという問題を分析しました。同時に、そのボクシングの国際大会が、第二次世界大戦の激戦地であるフィリピンと日本をいかにして結びつけたのかという相反するテーマについても考察を進めました。研究によって得られた成果は、2011年末に石風社から『ボクシング東洋選手権と大東亜の夢』として出版する予定です。刊行に際しては、敗戦によって命脈を絶たれたアジアへの欲望がスポーツの世界で再燃したことを指摘するつもりです。「東洋」という伸縮自在の枠組みが大東亜を彷彿とさせながら、日本やフィリピン、タイ、韓国などの国々を巻き込んでいく有り様を生の証言や新史料に基づいて描き出せればと思います。

最後になりましたが、博論の執筆に際して、実に多くの方々にお世話になりました。とりわけ、指導教官団の先生方には、公私にわたって深い愛情を持って接していただきました。清水展先生は京都大学へ異動された後も、フィリピンでのフィールドワークから論文執筆に至るまで厳しくも温かい助言をかけていただきました。また、膨大な史料をまとめ、新たな戦後史のストーリーを練り上げていく上で、有馬学先生の教えは私の研究に無くてはならない軸となりました。さらに、杉山あかし先生や三隅一人先生は、研究生時代から相談に乗っていただき、私が及びも付かなかったアイディアをたくさん提示してくださいました。最後に太田好信先生には、スポーツという言語化しづらいテーマを読み解く方法について、幾つものアプローチを教えていただきました。太田先生は博論指導の主査でしたが、日々、頂戴した叱咤激励がどれほど私を勇気づけたか、言葉にできません。

エッセイを締めくくるにあたって、私を支えてくれた友人たちについても触れたいと思います。私は比文自治会の前身となる「研究室運用委員会」及び「キャンパス移転を考える比文院生の会」の執行部として、六本松から伊都へのキャンパス移転を経験しました。出身国も文化も違う200名以上の学生の利益を調停するため、伊都図書館建設の遅れや研究室の新たな指針作りに対応しました。これらは正直、私の手に余る作業でしたが、同じ執行部のメンバーである松本匡志くんや木下直子さん、水野崇くんたちの協力を得たことで、自治活動と博論の執筆を両立させることができました。

私ほど、素晴らしい仲間に恵まれた学生はいないのではないかと思います。私は、長期に亘る研究生活を通して、自分がいかに周りの人たちから生かされているか、痛感しました。見ず知らずの私に何のためらいもなく、史料や証言を提供してくださった関係者の方々や、どんな時でも私を理解してくださった先生方、共に切磋琢磨した友人たち。多くの失敗や試行錯誤を経ながらも、博士号の取得に至ったのは、こうした人々に支えられ背中を押された賜物です。この場を借りて、お世話になった皆さんにはお礼申し上げたいと思います。

社会人としての新しい出発

周　　怡　来
（日本語教育講座）

2011年３月11日はわたしにとって一生忘れられない日となった。その日、わたしの博士学位論文審査が行なわれた。審査が始まって数分後、日本は東日本大震災に襲われた。信じられない、偶然。その日、わたしは日本とともに、新しい出発点にたった。

わたしはやっと学校を出て、一社会人となった。人生の旅には終点がないといつも思う。たとえあるとしても、その時、自分にはもう意識がない。人生は、出発、出発、再出発。唯一違うのは、次の出発点に向かう途中で貯蓄される「パワー」であり、それはもちろん次の出発のエネルギーになる。

考えてみると、前回の出発は、もう2007年の春、当時まだ六本松にある比較社会文化学府の博士後期課程入学式のときであった。そこで過ごした四年間、わたしは何をしてパワーを貯めてきたのか、思い出したい。



懐かしい六本松キャンパスでの入学式
左から２番目が筆者

「これまでで最大のチャレンジは何ですか」と聞かれたことがある。わたしは「博士学位論文です」と答えた。間違いない。もちろん、そのチャレンジをしたことで最大のパワーを貯められた。学位論文は、正直言うと、書くこと自体は早かった。一番時間がかかったのは情報・資料の収集と分析であった。毎週金曜日に博士ゼミがあった。わたしは「発表の内容はすべて、自分の新しい発見または考えにする」と最初から決めていた。もちろん、そうすると、根拠が足りず、直ちに正確な結論にはつながらないときが多いが、発表後、指導教員の松村先生とゼミに参加した皆さんからアドバイスを頂いて、さらに資料を調べ、観点を修正したり、充実させたりすることを重ねていくうちに、だんだん、だんだん、先が見えてくる。しかし、今更ではあるが、振り返ってみると、反省点もいくつかある。

一つは、もっと余裕を持って書けばよかったということである。わたしは何もかも、ぎりぎりまで粘ってしようとするタイプの人間であるため、いつも締め切り日の前夜は寝られない。それは自分にとっても決してよくないし、人に迷惑を掛けることにもなる。悪循環の元だと言っても過言ではない。私の経験から、今から博士論文を書こうという皆さんには、余裕を持って論文を書くことをお勧めする。

もう一つは、折角多くのゼミが開かれているのだから、他のゼミにも参加すればよかったということである。他のゼミで行われている研究の方向と内容は自分の研究と全く関連性がないかもしれないが、研究方法やゼミを担当する先生のアドバイスはどんな論文にも通用するものが多いので、参考になるはずである。

三つ目は、全ての指導教員のアドバイスを、最初からもっと聞くべきだったということである。自分の力を信じすぎないで、一人でも多くの先生に自分の研究レポートや論文を読んでいただき、アドバイスを頂けば、論文もより早く進めることができるはずである。

私自身は、以上の３点に気づいたのが遅かったため、最後の段階でたいへん苦労をした。徹夜の連続で体を悪くした時期もあった。もう一度チャンスを頂ければ、3年で修了できるかもしれない。

論文を書きながら、天神で週３～４回中国語講師のアルバイトもしていた。なぜ中国語講師なのかというと、博士学位論文を書くのは結構ハードな作業であり、常に論文の内容について考える姿勢でいることがよい結果につながる

のではないかと思い、自分の研究と接点がある中国語講師をすることにした。日本に来る前にも上海で日本人に教えた経験が数年あったので、面接で一生懸命アピールした。面接であろうと、何であろうと、「こんなことができます」、「こんなことがしたいです」と積極的にアピールすると、何かチャンスがあったら、周りから紹介してもらえる可能性が高い。

論文とアルバイト以外に、一番自慢できるのは、たぶん自分の英語力だと思う。就職した電通の内定式でTOEICを受けて、満点を取った。「どうやって勉強しているの？」とよく周りから聞かれるが、正直言うと、語学の習得はショートカットなんて全くない。普段からできることを続けることである。例えばテレビをつけて、英語の番組をみたら、チャンネルを変えずに番組が終わるまで「聞く」こととか、たまに英語の新聞を買って読むこととか、English Salonに行って、外国人と会話することとか、いろんなことが考えられる。個人的に英語雑誌を購入することは必要ないと思う。大学の図書館にも置いてあるし、毎回買っても内容が多すぎて、吸収できない。TOEICという試験は、企業で課されることが多いが、テストとしてはそれ程難しいテストではないと思う。何よりも、TOEICの点数はゴールではない。受験するために覚えた「文法」や「単語」を生かすことが目的である。そのつもりで、普段からできることを続けていくことが重要だと思う。

最後に、個人的に大好きな英語の言葉を紹介しよう。それは、Nothing is Impossible!（不可能はありえない）。やる気を持って、本当に目標に向かって一生懸命頑張れば、どんな目標でも達成できる。「28歳、文系博士、既婚、子連れ、中国人」と、こんなにたくさんのラベルを貼られると、「この先、この人にはどのような道が残されているのだろうか？」と思われるだろう。しかし、私は電通に入社することとなった。それは、四年間の研究で貯蓄した物凄いパワーのおかげだとしか思えない。その四年間はわたしの一生の宝である。研究することで身につけた情報収集力、考える力、プレゼン力、これら全てが、今の仕事にも生かせると思う。



就職後十国峠での記念撮影

このように、過去を振り返ることで、ワクワクすることができた。本当に九州大学に、比較社会文化学府に、指導していただいた先生方に心より感謝している。パワー蓄積の仕方を教えてくださって、本当に有難うございました。今後もより充実した人生を送れるよう、パワーを蓄積し続けていくつもりである。

さあ、新しい旅に出よう。
Nothing is Impossible ！ 日本、頑張れ！

祝　辞

田　中　良　之
（九州大学大学院比較社会文化学府長）

平成22年度九州大学大学院比較社会文化学府の学位授与式に臨み、学府長としてご挨拶申し上げます。

修士課程が日本社会文化専攻30名、国際社会文化専攻16名の計46名。博士の学士取得者は、課程博士が比較社会文化10名、理学１名、論文博士が比較社会文化１名、理学１名の計13名。以上合わせて修士46名、博士13名の学位取得者を送ることになりました。

まずは、このよき日を迎えられた皆さんに、お祝いを申し上げたいと思います。おめでとうございます。

修士になられた方は自らの専門分野における様々な知識と方法を習得され、あるいは異分野との融合を成し遂げて独自の領域へと向かい、修士論文を執筆し提出されたと思います。また、博士となられた方々は、すでに学界で業績を積み、独立した研究者としての自立の証を博士論文として提出されたことと思います。ステージは違えど、皆さんは私たち研究者の仲間としてこの場におられるわけです。修了後の進路については、博士課程に進学される方、研究教育職に就かれる方、あるいは企業や官庁へと就職される方、様々ではありますが、この比較社会文化学府で身につけられた学識とスキル、そしてそこから敷衍した見識を、人間として社会人として遺憾なく発揮され、それぞれの分野で活躍されることを希望します。

さて、皆さん方の在学中、じつにさまざまなことが起こりました。アメリカ発の世界的不況、戦後初と言っていい政権交代の実現とその後の政治の混迷。そして、今年に入ってからはチュニジア、エジプト、リビアへと続いたツイッター、フェイスブックなどを通じた民衆蜂起など、世界は大きく動いています。

そして、３月11日に起こった東日本大震災の災禍はいまだ進行しつつあるものであります。巨大地震とそれに続く津波は、阪神淡路大震災を遥かに凌ぐ規模の被害をもたらしました。また、追い打ちをかけた原子力発電所の被害は日本社会のみならず国際的にも大きな不安を与えていることは周知の通りです。

この地震は「未曾有」とか「想定外」という言葉で表現されました。しかし、この「未曾有」とか「想定外」という表現については、地球科学や考古学・歴史学を学んだ人であれば、それが近代以降の観測記録の範囲内でしか見ていないことがすぐにわかるはずです。平安時代の貞観の地震と津波は今回とほぼ同規模のものであったことは周知の事実でした。

ともあれ、この地震災害の中で、被災者が秩序正しく行動され、暴動も略奪も起こらなかった点は日本社会と列島住民の民度の高さを示すものとして世界で驚嘆されたところであります。しかし、政府や関係機関の情報開示、マスメディアによる報道に問題を抱えていることもまた、海外から指摘されたところでもあります。とくに、マスメディアから流される情報と、ツイッターをはじめとするネットメディアでリアルタイムで流れてくる情報とのギャップは大きなものでした。

現代に生きる私たちは、じつに多様な、そして膨大な情報を得ることができるようになっています。それは学問においても社会生活においても同様です。それらの情報から事実を選択し、評価して判断や行動の指針を自ら出さなければいけないのです。

そのための学識と方法を、皆さん方は「学際、国際、総合」のキーワードのもと、この比文で学ばれたのです。

皆さんはこの困難な状況を乗り越えて、比文で学ばれた成果を基盤としてさらに成長を遂げられ、各界で活躍されることと期待しております。それとともに、これから比文学府の後輩たち、教員たちの発展を見守っていただき、かつご支援されることをお願いして、修了式のご挨拶とさせていただきます。

本日は、おめでとうございました。

平成23年３月24日



平成22年度　九州大学大学院 比較社会文化学府 修了式
修士課程（国際社会文化専攻）



平成22年度　九州大学大学院 比較社会文化学府 修了式
修士課程（日本社会文化専攻）



平成22年度　九州大学大学院 比較社会文化学府 修了式
博士後期課程

平成22年度博士学位（課程博士）取得者および論文題目一覧

学位番号	学位の種類	（フリガナ）氏名	専攻名	博士論文名	授与年月日
比文博甲第160号	比較社会文化	池上大祐（イケガミダイスケ）	国際社会文化	1940年代アメリカの太平洋戦略と国際信託統治	平成22年4月30日
比文博甲第161号	比較社会文化	李作婷（リツォティン）	日本社会文化	台湾先史社会における稲作農耕の展開に関する研究 ープラント・オパール分析と石製収穫具を中心にー	平成22年9月27日
比文博甲第162号	比較社会文化	金雪梅（キンセツバイ）	日本社会文化	金子光晴の詩法の変遷 ーその契機と軌跡ー	平成22年11月30日
比文博甲第163号	理学	金映辰（キムヨンジン）	国際社会文化	海岸クロマツ林における樹木枝葉のバイオマス成長とこれを利用した森林防災機能の改善に関する研究	平成22年11月30日
比文博甲第164号	比較社会文化	乗松優（ノリマツスグル）	日本社会文化	プロボクシング東洋選手権とは何だったのか	平成23年3月24日
比文博甲第165号	比較社会文化	福永美佳（フクナガミカ）	国際社会文化	関漢卿旦本研究	平成23年3月24日
比文博甲第166号	比較社会文化	穴井綾香（アナイアヤカ）	日本社会文化	近世公儀権力確立過程の研究 ー江戸・駿府・京都をめぐる大名の模索ー	平成23年3月24日
比文博甲第167号	比較社会文化	王萌（ワンモン）	日本社会文化	日本人と中国人の不同意表明 ーポライトネスの観点からー	平成23年3月24日
比文博甲第168号	比較社会文化	周莉恵（シュウリエ）	国際社会文化	日本語学習者に対する日本語ディベートの指導法開発に向けた基礎研究 ーメタ言語表現による論理構造構築の観点からー	平成23年3月24日
比文博甲第169号	比較社会文化	周怡来（シュウイライ）	日本社会文化	情報認識という観点から見た日本語の連体修飾節への「という」の介入	平成23年3月31日
比文博甲第170号	比較社会文化	守友隆（モリトモタカシ）	日本社会文化	近世北部九州における情報流通と地域社会 ー御用達・「御用状」・「注進」・「軍記」をキーワードとしてー	平成23年3月31日

平成22年度博士学位（論文博士）取得者及び論文題目一覧

学位番号	学位の種類	（フリガナ）氏名	博士論文名	授与年月日
比文博乙第24号	比較社会文化	三ツ木道夫（ミツギミチオ）	翻訳の思想史 ー近代ドイツの翻訳論研究ー	平成22年4月30日
比文博乙第25号	理学	池上直樹（イケガミナオキ）	The vertebrate fauna and sedimentary environments of the Upper Cretaceous Mifune Group in the axial zone of Kyushu, Southwest Japan	平成23年3月24日